
魔都物語

碧風凜音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔都物語

【Nコード】

N3998V

【作者名】

碧風凜音

【あらすじ】

魔都、新宿

そこは夜になると魑魅魍魎が跋扈する犯罪都市。様々な登場人物の視点から快樂都市にして犯罪都市、魔都新宿を描く。

魔都

01：魔都

魔都。

かつてはヴェネチアが、上海が、そして香港がその名で呼ばれている。そして、日本の首都東京。ここにも魔都と呼ばれる都市がある。

それは新宿。

快樂都市であり犯罪都市。そして常人には知られない闇を持つ場所。それが魔都、新宿。

五年前 新宿

黒い法衣を纏い、血のような赤黒い髪と瞳をした女が新宿の都庁の屋上に立っていた。その女の名は樹。巷では死神と呼ばれている存在である。

そして彼女の肩には瞳も爪も毛並みも黒い、真っ黒な猫が乗っていた。

「魔が集っている。彼女の暗い心が、邪悪を引き寄せるのだ」

肩の上の猫がしゃべった。この猫は樹のパートナーでルヴァと言
う。

「加奈子……」

その女は都庁の屋上に赤いペンキで複雑な魔法陣を描き、その中心でなにやら呪詛の声を上げていた。

「……！！」

「加奈子！」

樹が叫ぶ。加奈子は自らの手首を何かの鋭い刃物で切って、その血を魔法陣の中心に落とした。

加奈子の周囲に集っていた魔が蠢き、加奈子を中心に螺旋を描きながら上昇し始めた。

「拙いな。早く止める！」

「わかった！！」

樹は屋上の床を蹴って滑空する。

「魂を切るは黒き鎌。来たれ！」

空中で黒い鎌を召喚すると、そのまま加奈子に切りかかる。ところが、瘴気が固体化し、加奈子と鎌を薄皮一枚で遮った。

「ちいっ！ Goddess、金の鎌を。魔を断つ鎌を使え」

「わかった。神魔を断つは金の鎌。来たれ！」

瘴気と接触したまま、釜の色が黒から金に変わる。すると固形化していた瘴気にひびが入り、樹が鎌に力を込めるとその瘴気は断たれた。

終わった　　樹がそう思った瞬間、加奈子は刃物を自らの心臓に突き刺した。

「なっ！」

あまりに突然のことに驚きの声を上げる樹。その間に加奈子は魔法陣の中心に倒れこんだ。

「にやる・しゆたん。にやる・がしゃんな……」

加奈子は最後に、そう呟いた。

加奈子の体から流れ出た血は魔法陣に染み渡り、やがて魔法陣が心臓のように脈動し始めた。

「しまった。儀式が完成していたか！」

「どうすればいいの、ルヴァ？」

後方に跳躍して魔法陣から離れる樹とルヴァ。その間にも魔法陣は加奈子の血を貪欲にむさぼり、暗黒の異形が這いでてくる。

「加奈子もすでに魔の存在となってしまう。もはや金の鎌である異形と魔法陣ごと滅ぼすしかない」

魔法陣より先細った触手が幾本も飛び出してきて、加奈子の体を宙に押し上げる。

「加奈子　っ！」

樹は絶叫すると、跳躍して加奈子の真上に出る。そして金の鎌を握り締め、落下の勢いとともに振り下ろす。

「邪悪に死神が与える慈悲なし！」

かつて親友だった者を両断し、その下にいる異形の肉塊を切り倒し魔法陣を破壊する。

閃光。

遅れて爆発。

音は、しない。

その中で、樹は加奈子の声を聞いた。

「もう、お姉ちゃんってば遅いんだから。もっと早く来てくれていたら私……」

言葉はそこで途切れた。

死神故に樹はほとんどの物理法則を無視できるが加奈子は違う。

魔に染まったとはいえ人間だ。この爆発では肉片すら残さずに消えてしまったに違いない。

「加奈子　っ！！」

あまりの眩しさに目を閉じながら樹は叫んだ。妹代わりだった者の名を。

「まずい、逃げるんだ。瘴気が消えていないぞ！」

ルヴァが叫ぶ。

「くっ！」

あわてて床を蹴って後方に跳躍する。光はだんだん大きくなってきていた。それからルヴァの指示で都庁から飛び降りると、全速力で都庁から離れる。

「ルヴァ、何がどうなってるの？」

滑空しながら肩の上の猫に声をかける。

「どうやら儀式が完全に成功したらしい。魔法陣を破壊したときにはすでに遅かったのだ」

そんなことを言っている間にも光は勢力を増していく。

必死で光から抜け出そうとする樹。都庁から数キロはなれた場所で止まった樹は、都庁をふりかえる。

光は、都庁を中心に約半径約一キロの空間に廃墟を作り出し、消滅した。都庁だけが無傷でそびえ立ち、周囲の建物や道路が大地震でも起きたかのように崩れていた。

生存者の気配はない。皆あの光にやられたのだろう。

「なんてこと……」

樹の声が力なく響く。

「加奈子……なんで……？」

ふと、一筋の涙が樹の頬を流れた。友であり妹代わりでもあった加奈子なぜあんなことを……

「考えても仕方が有るまい。今はあの廃墟を調べてその情報を天上に送るのだ」

「そうやって後手にまわるからこんなことになっちゃったんじゃない！ そのせいでいったいどれくらいの人が死んだと思っているのよ。結局は天上の人たちの不手際でしょう！」

樹が激昂するが、ルヴアはあくまで冷静に答える。

「すべては想定内だ。主の慈悲により犠牲者の魂は皆天上に迎え入れられる。善人も、悪人も、賢き者も、愚かしき者も……」

それが樹の怒りに火をつける。

「想定内！？ なのよそれ。犠牲になった人たちを侮辱しているの？」

「そうではない。こうなることも予想されていたから天上の門戸を開放していたということだ」

ルヴアの言葉に樹はさらにいらだちを覚える。そしてそれを相棒にぶつけた。

「予想されていた？ だったら天上の人たちはこの事態を防げたはずじゃない。加奈子のことだって……」

そういつて樹は言葉を止める。そこから先を口にするのは、彼女にとって簡単なものではなかった。

親友であり妹代わりであった加奈子が、邪悪に手を染め邪神を召還した。それは樹に悔恨という重い呪縛になってのしかかり、彼女を責める。

（あのとき、加奈子は助けを求めていたのに、私はそれを見抜けなかった……）

自責の念は樹を苛み、その瞳に涙を浮かばせる。だが、天上の目を持つてすれば加奈子の心に潜むわずかな闇も見逃すはずはないのだ。それなのに、最悪の事態を招いておいて想定内という、天上人の考え方が許せなかった。

「樹、おまえの考えもわからないでもない。だが、天上人や主の真意は、我ら末端の死神ごときには計り知ることはできぬ。ともかく、我らは我らにできることをやるしかあるまい」

「……」

ルヴァの言葉に、樹は無言で答える。拒絶したいが拒絶できない樹の心理の現れであった。

「樹……」

ルヴァが促す。

「わかったわ」

樹は呟くと宙に浮かび、廃墟となった都庁周辺に向かって飛び始めた。微かに瘴気を孕んだ風が、樹の頬をなでる。そして瘴気は、都庁に近づくほど強くなっていた。

「闇の気配がするわ」

「当然だ。加奈子が最後に唱えたあの呪文、邪神の中でもかなり性質の悪いものを呼ぶ物であった。奴が完全に顕現していたら、いくら不死の死神とはいえただではすまぬ。覚悟することだ」

「ええ……」

あの呪文は樹にも聞き覚えがあった。混沌の守護者にして黒き王を召還するための呪文。その存在は世界を捻じ曲げるだけの力を持つ。

樹は空を飛びながら都庁周辺の様子を探る。瓦礫だらけで生命の

気配はない。そして上昇し都庁の屋上へ。そこで樹が見たものとは

「お帰り、お姉ちゃん」

「加奈子っ　！」

樹は息を飲む。

そこには紛れもなく加奈子の姿があった。

「加奈子、加奈子！」

思わず加奈子に駆け寄る樹。だが、

「待て樹！　あれは加奈子ではない」

ルヴァの言葉に足を止める樹。そうだ、加奈子の命は自分自身が絶ったのではないか……

「残念。さすがに引つかからなかったか。加奈子の肉体は私がいただいたよ。なにせ、敬虔な信徒だったからね……」

「貴様っ！」

樹が金色の鎌を顕現させ、加奈子の姿をしたモノに踊りかかる。

「おっと」

加奈子の姿をしたモノは造作もなくそれを避けると、樹に向かって加奈子の手のひらを向けた。

光が溢れ出て凝縮する。

そしてをれが樹に向かって放たれる。

「ぐっ！」

それは違うことなく樹に命中し、樹は大きく後方に吹き飛ばす。そして、神気が大きく削られていた。

「くっ。混沌め……」

ルヴァが忌々しげに呟く。

「そうさ、私は混沌にして混沌の守護者。千にして一、一にして千のモノ。故に、道化なり、ってね」

そう言つと混沌は、加奈子の顔にピエロの仮面をかぶらせた。

「なんのつもり？」

訪ねる樹に、混沌は笑って答えた。

「道化の私には、道化らしい格好をするのがお似合いというわけさ。あつはははははは」

そう言うと、加奈子の纏う衣装が医者着る白衣の形をした、黒い衣に替わる。

「加奈子を汚さないで！」

樹は怒りに身を任せ加奈子だったモノに、混沌に切りかかる。金色の鎌は加奈子の胸を横凧にし

「痛いよ。お姉ちゃんったらひどいなあ」

加奈子の声が樹に降り注いだ。

「その姿で！ 私を！ 姉と！ 呼ぶなっ！」

樹は鎌を振り回しながら叫ぶ。

混沌は加奈子の体を汚しただけではなく、樹の中にある加奈子の思い出までも汚そうとしているのだ。いかにも人の心を弄ぶ道化らしいやり方だ。そしてそれが許せなかった。

そして混沌はでたらめに振り回される樹の鎌を避けながら、耳障りな哄笑をあげる。

「なにがおかしい!？」

激高する樹に、混沌はやはり笑いながら答えた。

「いやね、君の一途さに感動したのさ。感動して感動して笑いが止まらないよ。あつはははははは」

「おのれ！」

集中し、研ぎ澄まされた一撃が加奈子だった混沌を襲う。それは首を跳ね飛ばし、だが混沌は、地に落ちた首から笑い声を出し続けた。

「化け物め……」

ルヴァが忌々しげに呟く。それに対し混沌は笑いながら答えた。

「ふふ。ひどいなあ。確かに私は邪悪だけど、それでも神様だよ？

化け物はないんじゃないの、化け物は」

そう言うと混沌は、首を拾い上げて自らの胸にくつつける。

「だめじゃないか死神。これは君の大切な妹分の体なんだから、も

つと優しくしてくれなくちゃあ……」

「黙れ邪神！ 加奈子を、加奈子の体を返せ！」

樹の叫びに、混沌はくくくつ、と笑う。

「だめだよ。加奈子はすでに私の物だ。なにせ、加奈子が自分自身を生け贄にして、私を呼びだしたんだからねえ。生け贄は、捧げられた者が自由にしていんだ。それに、加奈子の中にある闇は、私にとって非常に住み心地がいい。だから加奈子は私の物さ」

混沌は光の玉を出してそれを樹にぶつける。

「ぐっ！」

「さあ、下等な死神ごときはこの場から消えたまえ。でないと、今度はその存在を滅ぼすよ？」

「樹、悔しいが我らとあやつではその存在の格が違いすぎる。本当に滅ぼされる前に引くぞ！」

ルヴァの言葉に、樹は表情を歪めた。だが、なにも言わずに後方に跳躍し、混沌と距離をとる。

「邪神よ、必ず加奈子は取り戻す。忘れるな！」

樹は叫ぶと都庁から飛び降りた。

そして滑空し、涙を風に流しながら都庁から離れていった。

この都庁周辺の謎の壊滅事件。この事件は後に洗礼事件ハプテスマと呼ばれ、この日から新宿に異形の物共が徘徊するようになった。

秋月堂書店

02：秋月堂書店

洗礼事件から五年。新宿は靈的な力場に満ちた場所へと変わっていた。

むろん普通の人間には何もわからないが、あの事件を境に新宿に集まりだした霊能者や神仙などと呼ばれる人を逸脱した存在、樹のような人ならざる者にはそれがはつきりとわかった。

そんな新宿の外れで小さな古書店を営む秋月義男の元を樹が訪れたのは、ある秋の日の黄昏だった。

「それで、加奈子は見つかったの？」

樹の問いに、義男は首を振る。

「いや、まだだ。新興宗教の幹部にそれらしい姿があったとの情報は入ったがな……」

この男、秋月義男は古書店を営む傍ら、裏の顔として人探し屋マン・サーチャーをやっている。

人探し屋とは、死と隣り合わせのこの街の中から、文字通り人を捜してくることを仕事のことだ。そんな危険な仕事を営む義男もまた只人ではなく、針使いと呼ばれる武術の体得者だった。

「その新興宗教が、どこかわからないの？」

樹の問いに、義男は残念そうに首を振った。

「それがわかれば苦労しねえ。連中、横の繋がりが強くてな、俺が加奈子を捜していることはもう筒抜けなんだ。ひよっとしたら死神、あんたのことも気づかれているかもしれん」

「それでも新宿一の人探し屋？ 情けないわね」

樹が侮蔑の表情でそう言うと、義男は意外だ、という顔をした。

「馬鹿言うなよ。俺だからそこまでたどり着けたんだぜ。他の人探し屋に任せていたら、今頃あの世行きさ。いや、もしかしたら死ぬ

ことすら許されないかもしれない。なんせ、邪神を信奉する連中だ。どんな邪悪な儀式の生け贄や実験台になるか、わかったもんじゃない」

義男はそう言っただけで恐ろしそうに首をすくめる。

「それもそうね。それじゃあ、これが今回の報酬よ」

そう言っただけで樹が皮袋から取り出したのは、金色の、拳大の大きさの石だった。

「お、こいつは大物のオリハルコンじゃないか。ありがとよ」

オリハルコンとは、公式にはこの世に存在しない物質で、神々の武器に使われる金属だ。それを樹はこの男に報酬として与える。

そしてこの男は、それを神鍛冶師と呼ばれる、この世の者ならざる物質を鍛錬する連中に売り渡す。そしてそれは法王庁などの邪悪と戦う組織に納められる。

「さて、それじゃああたしは行くわ。今夜から新宿の新興宗教団体を風潰しに探してみる。加奈子を取り戻さないよ……」

「まあ待ちな。まだ耳寄りな情報があるんだ」

その言葉に樹は歩みを止めて振り返った。

「なに？ つまらない情報だったら魂を狩るわよ」

「おお、怖い怖い。まあ、そう言っただけだよ。実はな、その新興宗教の一部に、ソーマを流している団体があるらしいんだよ」

「なんですって!?!」

樹の美しい顔が、驚きの表情に彩られた。

ソーマとは、ここ数年で流行り始めた麻薬の名だ。

幸福感と引きかえに、性格の凶暴化と、その服用者を軍用サイボーグ並みに超人化させる凶悪な麻薬だ。刹那的に生きる若者や、安価な戦力増強の手段を求める組織に愛用されているが、重度の依存性があり、服用し続けると脳機能が低下し、廃人になるなどの性質の悪い副作用がある。

「ソーマを……？ なぜ新興宗教団体がソーマを売ってんの？」

「さあな、おそらく資金源なんだろうが、テロ組織とかに流れてい

るらしい。最近新宿で暴力事件が鰻登りらしいんだが、このソーマが関わっているって話だ」

そう言っただけで義男は煙草を取り出して火をつけようとして、「おつと、ここは本屋だった。危ない危ない」と言っただけで煙草をしまい、代わりに爪楊枝をくわえる。

「でも……」

と樹が言葉を紡ぐ。

「ソーマを兵力として用いようとしている連中が、なぜ街中で貴重な兵力を暴れさせるのかしら？」

「さあな。実験とかじゃねーの？ 犯行声明もないし、どこかの組織との繋がりはまだ証明されてない。裏工作が徹底しているんだろうな。今んとこ中毒者の仕業として片づけられている」

「許せないわね……」

樹は大の薬物嫌いである。それは、薬物が人の魂を破壊するからだった。ことにソーマで破壊された魂は、死神でも回収できないほどにボロボロになる。

死神という一般的なには恐ろしいイメージがつき纏がちだが、実はとても慈悲深い存在である。

慈悲を持つて魂を刈り、その魂を天上の神々の元へと導く。そしてその魂は救済を受ける。いわば死神とは神のために魂を刈る農夫なのである。

そしてなにより、死神がもたらす死の間際には、この世では一切味わえないほどの幸福感を味わうことができる。

酒よりも、麻薬よりも、セックスよりも、成功がもたらすものよりも強い快感と幸福感を味わえるのだ。故に死神に魂を刈られた者は幸いである。なにより、現し世をさまようことなく天上まで導かれるのだから。

そして樹は慈悲深い死神であるが故にソーマを許せない。犠牲者の魂は天上に導かれることもなく、かといって地獄に墮ちることもなく、ただ永久にこの世をさまよい続けるのだ。

「許せないわね」

だから樹はその言葉を繰り返した。

「ああ、同感だね。なあ死神、俺が死ぬときはあんたが看取ってくれよ。こんな家業をしている俺だ、ろくな死に方をできないのは覚悟しているが、最後までらいいはあんたの綺麗な顔に見下ろされて、安らぎの中で死にてえや」

義男がそう言うと、樹は微笑んだ。

「いいわよ。あなたの魂は私が天上まで導いてあげる。でも、あなたほどの戦士なら、戦乙女フルキューレがお迎えにくるかもしれないわね」

そう言つて笑う樹に、義男は

「戦乙女か。そいつも悪くねえな」

と呟いた。

戦乙女はオーディーン神に使える美しい永遠の乙女たちで、羽根兜と鎧、天空のドレスで身を固め、剣と盾を持ち翼の生えた天馬を駆る。

彼女たちはオーディーンの命を受け、天馬に乗って戦場を駆け抜け、戦死した勇士たちを天上へと迎え入れることを仕事としている。いわば戦士たちにとっての死神である。

死神と違うのは、死神が寿命を迎えた者の魂を刈ることが仕事なのに対して、戦乙女は戦死した者の魂を導きもてなすのが仕事なことだ。故に彼女たちは例外なく美しい。

「でも、安心していいわ、秋月。あなたの寿命はまだ私には見ええない。あなたが死ぬのはまだまだ先ね」

死神は生きている者の寿命をある程度みることができると。死期が迫った生き物とそうではないものとは見え方が違うのだ。そして義男はまだ死期が近づいていなかった。

「そいつは有り難い。まだまだ死ぬつもりはないからな。おっと、話がそれたな。そのソーマのことなんだがな、五つの団体まで絞れたんだ。情報屋の手も借りたが、あんたからもらったオリハルコンで十分釣りがるからその点は気にしなくていい」

爪楊枝をくわえながら義男が言う。

「で、だ。その団体の名前は暁の黄金星団、ブラックネス・スフィア、幸せの会、スター・ティア、銀色の羊教団だ。この五つのどれかにソーマを流している団体がある。そしてそこに加奈子がいるはずだ。ソーマの取引現場にピエロの仮面を付けた奴がいたって話だからな」

ピエロの仮面

その言葉を聞いた樹がぴくりと体を動かす。忘れもしない五年前、邪神が加奈子の顔につけたのがピエロの仮面だった。

「私は混沌にして混沌の守護者。千にして一、一にして千のモノ。故に、道化なり、ってね」

混沌そのものである邪神の言葉は、今も樹の脳裏に焼き付いている。

「加奈子……」

その名を呟くと、暖かさや憎しみが一緒に沸き上がってくる。妹代わりであった加奈子に対する愛情と、その加奈子を奪った邪神への憎悪。

「だが、なんで世界を捻じまげることができるほどの力を持つ邪神が、新興宗教なんか作って麻薬を流しているんだ？ 奴の力なら、地球を跡形もなく消し去ることだって可能だろう？」

義男が疑問を述べる。それは樹も不思議に思っていたことだった。「おそらく、これは奴にとってはゲームなのだろう。泡沫の現世を退屈にしないためのな。奴の究極の目的は地球ごとくではなく宇宙の破滅。そしてそこからもたらされる、奴らの宇宙の創世だ」

ここで初めて、樹のパートナーであるルヴァが口を開いた。今のルヴァは黒猫の姿ではなく黒いマントを羽織った金髪的美青年の姿をしている。マントを羽織った人間など今の新宿では珍しくない存在なので、ルヴァが人間の注目を集めることはい。

「宇宙の創世？ もしかして、ネガ・シエネシス反創世？」

樹がパートナーに尋ねる。

「そつだ。反創世こそが奴らの目的だ。そこに至るまでの課程は、あの混沌にとつて遊びにすぎない」

表情を変えずにルヴァが言つと、樹が怒りを露わにしてルヴァに食つてかかった。

「反創世つて、サタンの目的じゃない。奴らは、サタンとつながっているともいうの!？」

「わからん。だが、ある程度までは目的は一致している。その同盟がいつ崩れるかわからない脆いものであるにせよ、手を組んでいないと言つ保証はない」

「そんな!」

樹が叫ぶ。ルヴァはそんな樹を諭すように言った。

「あくまで可能性の話だ。それに、邪神どもとサタンが目論む宇宙は形が違う。なにせ邪神どもの宇宙では、サタンですら存在が許されないのだからな」

「ずいぶんとスケールの大きな話だな。だが、一介の人間である俺にはそんなことはどうでもいい。現世こそすべてさ。で、だ。さっき言った五つの教団、あるいは魔術結社と言つてもいいかもしれないが、その中に確実に加奈子がいる。しかし俺が調べられるのはここまでだ。これ以上深入りするとまじで戦乙女が迎えにくるかもしれないからな」

爪楊枝をくわえながら義男が言う。それに対して樹はうなずいた。「ええ、そこまで調べてくれれば十分よ。後はあたしたちが調べるわ。ねえ、ルヴァ」

「ああ。人間にしてはよくやってくれた。我らだけではそこまですり着くまでもっと時間を要しただろう。感謝する」

そういつてルヴァは頭を下げた。

「へえ、死神の旦那に頭を下げられるなんてね。こいつは一生の記念になるな。まあ、こつちも仕事なんだな、対価をもらった以上はそれなりのことはやるさ。それよりだ、もう一つ耳寄りな情報があるんだが、聞いていかないかい？」

「なに？」

樹が興味を示すと、義男は手を広げて何かを要求する仕草をした。
「秋月はちゃっかりしているわね。はい、オリハルコン」

樹は苦笑しながら小粒のオリハルコンを義男に手渡す。

「サンキュー。別口で入った仕事なんだがな、ピエロの仮面を付けた人物を探れて依頼があつたんだ。あんたが先客だったんで断つたが、雰囲気と物腰からして、麻薬関係の捜査官だな。で、俺の勘だが人間じゃない。身長が二メートル三十くらいの巨漢だった。あんたらなら心当たりあるんじゃないのか？」

義男の問いに、樹は少し考えてから答えた。

「おそらく、^{ネフイリム}巨人族ね。人間の始祖にして、ノアの大洪水の生き残り。方船の屋根に逃れることで生き残つたと言うわ。そして、体を縮めて人間社会に溶け込んだの」

「へえ、ノアの方船は伝説じゃなくて本当のことだったのか」

義男が感心したようにそう言うので、ルヴァが苦笑した。

「もっとも、今残っている伝承は、かなり脚色されたものだがな…

…」

「だろうな。俺は神の存在は信じるが聖書の記述や教会の言葉は信じちゃいない。あれは、神の言葉じゃなくて人間の言葉だからな」

「それが賢明だな。むろん、教会に所属し主に奉仕することはよいことだが、そこで語られる言葉にどれだけの真実があるか……主の下僕である我には疑わしいことだらけだ」

ルヴァの言葉に今度は義男が苦笑した。いかにも本当に神に仕える死神だけはある。そう思ったのだ。

「まあ、その巨人の麻薬捜査官が、加奈子のことを探っていた。そいつを頭の片隅に入れておいてくれ」

「わかったわ。ありがとう」

樹は礼を言うと立ち上がった。

「そろそろお暇するわ。ありがとうね、秋月」

「ああ、こっちこそ、上質のオリハルコンをいつももらえて感謝し

ている。不死の死神にこう言うのもなんだが、無事でな」

そう言って義男は片手をあげる。

「不死と言えね、一ついいことを教えてあげる。純血の人間種だけに行使できる特殊能力があるの。ほとんどの人間はそれを知らないけどね」

そう言って樹は微笑んだ。

「純粹なる”対不死”の能力。不死の存在を完全に滅ぼせる能力。そう、私たち死神や邪神どもを、そして主ですら滅ぼすことのできる、最強の力。それが、純血の人間種だけが行使できる特殊能力よ。これとあなたの針の力を併せて行使すれば、この新宿に巣食う化物どもにも負けないわ。忘れないで、秋月」

人探し屋は危険な職業だ。この言葉は、危険な仕事に従事する人間の友人を思っただけの言葉だった。

「おう。ありがとな。死神、いや、樹。気をつけるよ」

「ええ……」

そう言葉を交わして、樹は秋月堂書店から去っていった。

バー『三途の川』

03：バー『三途の川』

新宿中央公園。そこは恋人たちの憩いの場。

だが、夜は、魔性が集う。

東北の地方都市から就職のためにやってきた青年は、酒でも飲もうかと新宿駅で降りた。

だが、そこは彼が知っているいかなる街とも違っていた。

裏通りに入ると、マントやローブを纏った不審者が大勢いる。本能的に危険を察知した青年はその闇から逃げて周り、いつの間にか新宿中央公園に迷い込んでいた。

「なんだ、人間か」

女の声とする。

振り返ると、扇情的な服を着たグラマラスな美女が立っていた。

「あ、ども……」

青年は日本人特有の曖昧な笑みを浮かべて挨拶をする。

が

「なんだい、結構美味しそうな坊やじゃないかい」

女はそう言って舌なめずりをした。

「え……？」

青年が異様な雰囲気飲まれかけたその時、目の前の女が変容した。

筋肉が盛り上がり、全身に毛が生える。顔も大きく歪み、服が裂ける。

青年があっけに取られたままその一連の事象を見守っていると、そこに立っていたのは虎の顔をした毛むくじやらの女だった。

ベルゼルグ
獣人

人間の中に混じり闇の中に生きる魔性の種族。

そして虎女が咆哮を上げ青年に襲いかかる　と、どこからともなく一本の針が飛んできてそれが虎女に突き刺さる。

すると虎女は体内に飲み込んでいた爆弾が爆発したかのようにバラバラになり、下半身だけになって倒れた。

「よう、大丈夫かい？」

その声は、秋月堂書店の主にして新宿一の人探し屋、秋月　義男だった。

無論、田舎出の青年にはわからないことではあるが。

「あ、はい……」

あつけに取られた青年が呆然としてしていると、秋月は彼に近寄って肩を叩いた。

「純血の『人間種』か、おい、兄ちゃんどこから来た？」

「え、あ　」

青年は自らの出自を正直に答える。就職試験の帰りに新宿に寄ったことも。

「そりゃ運が悪かったな。兄ちゃん、洗礼事件って知ってるかい？」

「ええ。都庁付近が壊滅した……」

「さすがに国家的な事件だったから知ってるか。で、だ。洗礼事件以降、とある理由により新宿にはああいっただ化物がうるうるするようになった。堅気の間人が夜に独り歩きするには、ちょっと危険な街だぜ、新宿はよう」

「さっきのは一体……」

「ああ、あれは獣人って言って、人間の肉を好んで食らう化物さ。

狼男とか知ってるだろ？　ああいうのの血脈さね」

「そうなんですか……」

青年はまだ現実味を得られないといった様子で答えた。

「で、酒を飲みに来たんだっけ？　兄ちゃんは」

「はい。でも、さすがに帰ろうかなと……」

「そりゃいけない。夜が明けるまでは酒場で飲んでいたほうがいい。いい店を知っているんだ。案内しよう、ついていきな」

「あ、はい」

青年は歩き出した秋月の後についてコマ劇場近くの一軒のバーに入った。そこはネーミングセンスのよろしくないことに、『三途の川』という名前の店だった。

「いらつしやいませ……って、秋月じゃない」

そう言ったのは長い黒髪の美女だった。

「よっ」

秋月はその美女に軽く手を上げると、カウンターに座った。

「あら？ お連れさん？」

美女が尋ねる。

「ああ、堅気の兄ちゃんだ。就職試験の帰りに新宿に寄って、獣人の餌になりかけていたところを助けたのさ。兄ちゃん、この人は冬風 樹。この店のオーナーだ」

「高木 真一です」

「そっぴや俺も名乗ってなかったな。秋月っていう。よろしく、兄ちゃん」

「よろしくおねがいします。冬風さんに秋月さん」

高木が挨拶をすると、秋月と樹 死神 は口々に答えた。

「それにしても、この新宿は一体……」

高木の言葉に、樹が答える。

「五年前の洗礼事件以来ね。この街が魔都に変わったのは」

五年前、都庁に邪神が降臨した。その時の神圧で都庁周辺が瓦礫の山に変わり、以後その近辺は開発の手が入らないままに瓦礫が放置されている。

「邪神、ですか？」

「そう。宇宙的悪意。外なる宇宙からやってきた混沌の王と呼ばれているわ。まあ、東北から来たあなたにそう言っても簡単には信じられないでしょうけど」

樹がそう言うと、高木は「いえ」と答えた。

「『C』の無貌の神ですよ聞きかじりの知識でしかないですけど」

「御名答。どこで聞きかじったかは知らないけど、深入りしないほうがいいわよ。正気が失われるから」

「ええ、それも知ってます。ただ、実在するとは知りませんでした」
「まあ、そうよね。ところで、何を飲むのかしら？」

樹の問に秋月は「ブラッディー・マリー」と答える。

「ウイスキーがほしいんですけど、メニューありますか？」

高木のその言葉に樹はアルコールのメニューを出す。

「じゃあ、マツカランで」

ウイスキーのロールスロイスと呼ばれる上質の酒を高木は頼んだ。ちなみにワンショット千円である。

「あら、お金あるのね」

「まあ、ホテルに泊まらないで酒を飲んで一晩過ごす気でいましたからある程度は……」

「ふうん。それにしても今時東京で夜歩きは危険よ。新宿は言わずもがなだし、渋谷は日本古来の妖怪種のうるちよろする街だし、池袋は海外からやってきた妖怪種や夜の勢力の盛り場ですもの」

「そうなんですか……」

高木はそうこぼして酒を一口すすする。

「ジニアス 魔人、オートマタ 動く人形、生体サイボーグ、神仙、羅漢、夜の勢力、獣人、天使、悪魔、巨人、妖精、龍神……まあ、いろいろ居るやな」

秋月が軽く解説する。

「そういえば、あなた方は普通の人間なんですか？」

「あたしは、死神と呼ばれる主の眷属よ……元々は人間だったけど」

「俺は、普通の人間さね。ただ、針使いという武術を体得しているから、化物共と戦う力がある。それ以外はただの人だ」

「……死神？」

樹の言葉に高木は疑問を挟む。

「イメージする通りよ、たぶん。寿命を迎えた人の魂を天上に導いて、死後の安らぎを与える。それが死神の仕事よ」

「その死神がなんでバーのオーナーなんかを？」

「一応ここは人間の街ですもの。浮浪者をやるならともかく、人間の顔を持って活動するには、なにか仕事をしないと」

「そういうことだ。俺も書店の店主をやってるよ、表向きはな」

二人の言葉に高木はなるほど頷く。

「新宿の縮図を見たいなら、殺人競技会に行ってみるのもいいかもしれないが……」

「私は嫌よ。それに、あそこの死者は戦乙女の管轄ですもの」

樹が心底嫌そうにそう言うと、高木は「戦乙女ってゲルマン神話のあれですか？」と聞いた。

「ええ。オーディーン神に仕える美貌の乙女たち。その仕事は戦いで死んだ勇者の魂を天上に導いて奉仕することよ」

「そのへんは知ってますけど……一応フリークスなので。死神がいてオーディーンがいて唯一神も居るんですか？」

そして、複雑ですね。とつぶやく。

「主は、唯一神ではないわ。確かに聖書系列の神ではあるけれども……。それについて詳しいのは、ルヴァかしらね。ルヴァ、いる？」

樹が呼びかけると、虚空からマントを羽織った金髪的美青年が現れる。バーの客たちは慣れているのか驚かないが、高木は驚いてショットグラスを取りこぼした。

幸い、落ちたのはカウンターの上だったのでグラスは割れなかったが酒がこぼれた。

「大変、これで拭いてくださいな」

樹は高木におしぼりを渡す。

「この人、は……？」

高木の問に

「我はルヴァ。樹のパートナーだ」

と一連の騒動を無視してルヴァは答える。

「それで樹、主についての説明か？」

「ええ。お願いできる？」

ルヴァは頷くと説明を始めた。

人間が誕生する遙か以前、宇宙では外なる宇宙の邪神と旧神と呼ばれる善き神々が争っていた。

やがて旧神は邪神を追放して封印する。

そして、主がベテルギウス座から邪悪の支配する地球にやってきて、各種神話系列でその名を知られる神々とその眷属を作り、自らの手足として天使と人間を作った。それらは全て、『C』とその眷属に対抗するために作られた生体兵器であった。

そして『C』が海底に沈みアダムとイヴが知恵の実を食べて楽園から追放された。

そして人間は不死を失い、死んだ人間の魂が彷徨うと悪鬼悪霊となるため、それを導くため死神が創りだされた。

それがルヴァの語った全てだった。

「それ故主は絶対神として地球に降臨しているが、唯一の神ではない。古き善き神々の一人なのだ」

「なるほど……」

「まあ、死神の歴史はそれほど古くないのよね……」

そう言って樹は秋月におかわりの林檎酒シードルを置いた。

「あ、僕は蜂蜜酒ミードとレバーペーストを」

「はい」

樹はグラスに氷を入れて蜂蜜酒を注ぐと、カウンターに置いた。

それから冷蔵庫からレバーペーストを取り出して器に盛り、スライズしたパンを周りに添えて高木に提供する。

「ところで、さつきちよこつと触れた殺人競技会ってなんですか？」

「まあ、殺しありの格闘技大会だな。その大会で生き延びると闇の組織から殺し屋としてお誘いがかかる。人間の中に混じって暮らす化け物どもがここで人間の世界での身分を得ていることが多いな。表向きはガードマン、ってことだな」

「まあ、だいたい人間と変わらない外見をしているものね、普段は。ただ、私のような人外ヒトコトの存在になった元人間ならともかく、もとからの人外には戸籍がないから、日本の社会で暮らそうとすると色々

と苦勞があるのよね」

アメリカのなら難民のふりをすればいいのかもしれないが、日本のようにシステムががちりしているところでは化け物は表社会では生きづらいのだ。

「それなのになぜ、日本の、それも東京に集まるんですか？」

「それは、混沌の放つ神気が原因だな。やつが新宿にいるおかげで、人外の者が暮らしやすいんだよ。神社や神殿で聖なる者が暮らしやすいように、この魔都は人外の化け物どもが暮らしやすいのさ」

「それは、空気みたいなものですか？」

「そそ。そしてそこに集まる化け物を狩ったり、人間を守るために、法王庁や戦略退魔軍なんか新宿に支部を置いている」

「戦略退魔軍？」

聞きなれない言葉に高木が疑問を挟む。

それに対して秋月が解説する。

アメリカに古くから有った、人外の者と戦うための影の組織で、だが世界規模を誇る軍隊だ。獣人の遺伝子を移植した遺伝子保持者ジーンキャリアや各種宗教の退魔師、オリハルコンでできた装甲鎧を着て戦う竜装ドラグーン騎兵ライダーズなどが居る。

「彼らは世界各地で起こる心霊事件から人間の世界を守るべく影で戦い続けてきた。百年以上を誇るその歴史と、そこから集積された退魔の術は、侮ることができない。それになにより、人間だけが誇る唯一の能力がある」

「能力？」

高木がオウム返しに尋ねる。

「対不死の能力……純血の人間種だけが行使できる、主に与えられた絶大なる力よ」

それに対して樹がそう答える。

「へえ……新宿に立ち寄ってから、まだ数時間なのに、僕の今までの常識が音を立てて崩れていく感じがしますよ」

「だろうな。五年前の俺もそうだった。樹とルヴァに世界の成り立

ちを聞くまではな。まあ、実際のところ五年前までは渋谷や池袋のほうがすごかったんだよ。妖怪が多かったからな。樹が死神になつたのが十年前つて話だから、昔から人外のものはいたんだがな。ああ、チーズ盛り合わせくれ。予算は五千円」

「五千円？ ずいぶんと使うわね」

「こないだもらったオリハルコンを売り払ったからな。それなりの収入になった」

驚く樹に秋月はそう話す。

納得した樹は冷蔵庫から青カビのチーズや白カビのチーズウオツシユチーズなどを取り出して盛り合わせると、そこにクラッカーを添えて秋月に提供する。

「そついや、彼女の件はどうなった？」

「情報屋に各種魔術結社の探りを入れさせてる。迷宮横丁の情報屋を総動員してるわ」

「彼女？」

「邪神を降臨させた張本人さ。今は邪神そのもの。この五年間、裏から新宿を動かしてきたんだが、最近やっとその隠れ家分かりそうだね」

「……あまり関わらないほうが良さそうですね」

秋月の解説に高木は青ざめた顔でさういう。

「そうでもないさ。奴は千の姿を持ち人間の形も取る。だから、邪神の中では人間には理解しやすい存在でもある」

「なるほど……」

「まあ、兄ちゃんはこの世界には関わり合いにならないほうがいいさ。夜の新宿にさえ気をつけてれば、東京は今でもまだ世界でも格段に安全な都市だ。就職しても大丈夫さ」

「それを聞いて安心しました」

「ところで、どんな仕事に就く気なんだい」

「ゲーム会社のシナリオライターです」

「へえ、物語紡ぎか。知ってるか、そういう退魔の力もあるんだぜ。」

言葉を紡ぐことによってあらゆる事象を操り、『その心臓は凍結して砕け散った』と言うだけで本当に心臓を凍らせちまう力を持った連中が」

「さすがに、僕には無理ですよ」

「それから、遊戯使ゲーミング・マキいって連中もいる。ゲームのキャラになりきって超絶的な格闘能力を誇ったり、あるうことか自分の死を『コンテニュー』できる」

「はあ！ なんですかそれ！」

「いやいや、普通の人間がなぜだかそういう技術を身につけちまうんだよ」

驚く高木に秋月は軽く手を振りながら答える。

「非常識すぎますよ、さすがにそれは」

「まあ、神様がいるんだ。何があってもおかしくはないさ」

「さすがに主のせいにするのはどうかと思うけど、秋月？」

樹が冷たい目で秋月を睨む。

「はっはっは、気にするな」

「刈るわよ？」

「冗談だ」

「本当に？」

「ああ」

「……納得できないけどそういうことにはしておきましょう」

樹は溜息をつく。

「そのほつが精神衛生上安全だ」

「そうね」

よくわからないところで合意が形成され停戦協定が結ばれる。

「さて、そろそろ始発の動き出す時間ね。店を閉めるわよ」

「わかった。兄ちゃん、新宿駅まで護衛しよう」

「ありがとうございます。ごちそうさまでした」

そうして、会計をして秋月と高木は『三途の川』を後にする。

そして、新宿駅。

「今夜は色々とありがとございました」

「いいさ。これも縁えにしってやつだろうさ」

そう言ってて秋月は手を振る。

「じゃあな、兄ちゃん」

「それでは」

「二度と遭あわないことを祈いのってるぜ。兄ちゃんの安全のためにもな」

「はは……そうですね。新宿には気をつけます」

そう言っと高木は振り返りかって歩き出した。

改札を通りぬけ中央線のホームに向かう。

東京駅から新幹線で仙台まで行き、そこから電車で一時間。そこ

が彼の今の住処だった。

イグニッション

魔都、新宿。

魔都の闇に潜む影。

その影から人々を守る組織がある。

戦略退魔軍　アメリカで作られた霊的現象から人類を守るための組織だ。

その中に他の退魔軍とは異色の部隊がある。

ドラグーンライダーズ
”竜装騎兵“ 略してDRである。

霊力をエネルギー源に動く可変バイクで街中を疾走し、いざ事があれば^{起動}Ignitionしてその身をバイクから変形した装甲鎧で纏い、人々を守る。

その活動の認知度から影の組織戦略退魔軍の宣伝塔となり戦い続ける。それがDRだ。

今日も彼らは新宿の街を駆ける。夢で悲劇を予知する^{ユメミ}夢見が予知した悲劇を未然に防ぐために。

夢見の巫女蓮華^{れんげ}は、悪夢で目を覚ます。

「蓮華……」

蓮華の側で声をかけるのは彼女の精神安定を保つためのパートナ―由紀。黒い髪を結い上げ、眼鏡をかけた才女風の女性だ。

「夢を、見ました」

蓮華は銀色の髪に白い肌、赤い目をしたアルビノの少女。

夢見は例外なくアルビノである。

「そう、どんな夢ですか？」

由紀はパートナーを気遣いながら声をかける。

「霧です。霧に街が覆われていました」

「場所は？」

「新宿御苑です。街というよりは公園といったほうがいいかもしれ
ません」

「御苑の、何処でした？」

夢見のパートナーは夢見から可能なかぎり情報を引き出す。それが悲劇を防ぐことにつながるからだ。

「フランス式整形庭園ですアメリカフヨウを中心……」

「そう。それで、霧がどうしたのです？」

「霧に覆われた瞬間、人々が干からびて行きました」

ヴァン・バイザ・ミスト
「吸血の霧ね」

「はい……」

吸血の霧。

それは吸血鬼の中でも高位の者だけが取ることができる形態。血を吸う魔性の霧である。ただし、その力を真祖は行使できないすなわち、一親等から二親等のレッサ・ヴァン・バイザ亜種吸血鬼に敵は限定される。

「わかりました。アクセスポート接触。デウス・エトナナ機械の神の名において命ずる。新宿に住まう亜種吸血鬼、その中でも危険なものをリストアップせよ……」

機械の神、それはありとあらゆる機械を自由自在に操る絶対者である。電話回線から霊子コンピュータまで、はたまたサイボーク機械人間の部品までありとあらゆる機械を好きに操ることができる。由紀は機械の神の力を使い、手元の端末から戦略退魔軍のマザーコンピュータにアクセスすると、管理者権限で操作し事件を起こしそうな危険な亜種吸血鬼をリストアップさせる。

『リストアップ完了……デイル・ロバート・クーンツ、クイーン・オブ・エラリー、ステイブ・M・キングの三名に絞られました』

そして昼食後……

「というわけで、この三名の監視及び事件を起こした場合の撃退が今回のあなたたちへの任務になります」

DRの司令室。日本中からより集められた五名のDRの適格者に由紀が告げる。

「じゃ、俺はクーンツを監視しよう」

そう言ったのは赤毛の骨太の青年、橘紳一郎。DRのリーダーである。二十五歳で唯一戦略退魔軍に正式所属している。

「茜はエラリーを」
「了解」

紳一郎の声に答えたのは悠木茜、十五歳の黒髪ロングの少女である。戦略退魔軍附属高校を抜けだしてきたのでセーラー服のままだ。
「水樹はキングを」

「アイアイサー」

仰々しくそう答えたのはボーイッシュな十歳の少女早瀬水樹である。戦略退魔軍附属小学校に通っている。

「良一と彰は新宿御苑で待機」

「ラジャー」

「オーケー」

須藤良一は二十歳の戦略退魔軍附属大学の学生。抜き身のナイフのような鋭利な印象を与える青年だ。

中田彰は十三歳の戦略退魔軍附属中学の生徒で蓮華と同じアルビノ。彼もまた夢見である。彼は白い学ランを着ている。

「同じ夢は僕も見たよ。僕達は何か装甲鎧に紋様を描いて戦っていたね。そこが奇妙だったからよく覚えてるよ」

「吸血鬼避けの紋様だな。呪符にしてもある程度は効果がある……」
良一はオカルト専攻なので夢見が得たヒントから対策を考えだすことが多い。

「なるほど……由紀姉ちゃん、ドラグーン竜にメンテナンスよろしく。それから、呪符マシンガンを僕の竜に装備させといて」

水樹がそう言うつと由紀は「わかりました」と答えた。

「霧かぁ……レーザーサイトがほしいわね」
「用意しておきます」

茜の言葉に由紀はそう答える。

吸血鬼は霧から人型あるいは蝙蝠に戻る時が一番無防備になる。その一瞬を狙おうという手だった。

「もちろん対吸血鬼用の銀の銃弾は用意しとけよ」

「当然です……」

紳一郎の注文に由紀は眼鏡を左手の中指でクイツと持ち上げて答えると、その他に必要な装備は？ とメンバーに聞いて手元の端末からマザーコンピュータにアクセスして準備をさせる。

そうして打ち合わせが住むとDRのメンバーたちは解散した。

夕方、学業を終えたDRのメンバーたちは司令室に集まると、装備を受け取った。

「一応暗視装置も用意しておいたわ。三名の亜種吸血鬼の住所は竜の方にインプットしておいたから、後で確認してください」

「了解。茜と水樹はなにか異変があっても連絡を入れて後をつけるだけにしてくれ。実際にことが起きるのは新宿御苑だ。無理をすることはない」

「わかりました」

「はい」

歳若い高校生の少女と小学生の少女である茜と水樹に無理はさせたくない。それが紳一郎の考えだった。

「良一と彰は呪符マシンガンを持って新宿御苑で待機。霧が出たらすぐに人々の保護を」

「了解」

「オーケーです」

一方男性陣には容赦はかけない。と言っても直接対決させないあたりそれなりに気遣っているのではあるが。

「戦闘は五人揃ってからだ。いいな、各自無茶はするなよ」

「了解」

「では、行くぞ」

そして五人は倉庫から各自のバイクに乗って夜の新宿へと繰り出した。

ケース1 クーンツ

「こちら紳一郎。標的のマンション前の物件に到着。屋上から観測

中だが、酒を飲んでいて動く気配はない。酒の銘柄は……スピリタスをストリートだと!? 信じられん」

スピリタスとはアルコール度数九十六度のウォッカである。

「猫……三匹か。優雅な生活だな」

観測を続けながら伸一郎はつぶやく。

「とりあえずこちらに異常はない。茜と水樹はどうだ?」

ケース2 エラリー

「こちら茜。標的は一軒家です。データでは一人暮らしですが誰か人がいるようです……やだ、裸じゃない……」

エラリーは窓際で裸になって豊かな胸を晒していた。そしてそのかたわらには男が見える。

「やあ、男も裸!」

『茜、赤外線モードに切り替えとけ』

良一から通信が入る。

赤外線モードに切り替えるとサーモグラフィのような表示に変わり人体の細かい部分ははっきりしなくなった。

「ありがとう、良一さん」

『気にするな』

ケース3 キング

「こちら水樹。ターゲットは近所のコンビニでタバコを買っています」

『動いているのはキングだけか……水樹、ヤツの動きに注意しろ』

伸一郎からの通信が入る。

「了解」

「路地裏に入ります……あ、蝙蝠に変身した。こいつでビンゴだね」

『水樹、警戒しつつ尾行。道路交通法は守れよ。一応、ここは法治』

国家だからな』

「わかってるよ伸一郎兄い。十歳の僕とか十三歳の彰兄いがバイク

乗れるのは戦略退魔軍だから特例なんだもんね」

『そういうこと。解っているならいいさ』

「じゃ、尾行するよ」

『了解』

そして水樹は蝙蝠を尾行するが空を行くのと地を行くのとではどうしても差がありすぎた。やがて水樹は蝙蝠を見失う。

「ターゲットロスト」

『オーケー。茜と水樹は新宿御苑に急行。俺も向かってる。良一と

彰は戦闘準備』

『了解』

そして五分後、新宿御苑に霧が広がり始める。

「来たね」

彰の言葉に

「そうだな。行くぞ！」

良一が頷く。

『イグニツション！』

二人が叫ぶと、バイクが変形し二人の体を鎧う。

良一は黄色い鎧。彰は青い鎧だ。

脚部ローラーを展開してローラーダッシュし、霧へと向かう。

そして右足部分に装着された呪符マシンガンを装備すると周辺の人々に向けて撃ちまくる。

撃たれた人々は当然悲鳴を上げるがその体に呪符が張り付くだけで何も起こらない。

いや、実際には対吸血鬼用の紋様が描かれたその呪符は吸血の霧から血を吸われるのを防いでいるのだが。

『オノレ』

霧が、おぞましい声を発する。

霧が収束し人の形を取る。と

遠方から一発の銀の銃弾が吸血鬼

キングの肩を貫いた。

「グハッ」

「よし、ヒット！」

「茜！」

それは新宿御苑に到着してからフランス式整形庭園とイギリス風景式庭園の境目からスナイパーライフルで狙撃チャンスを待っていた茜が放った銃弾だった。茜は緑色の鎧を聞いて俯せになっていた。「オノレ人間メ！」

ヒゲを生やした割と洪めの中年男キングは怨嗟の叫びを上げると、狼のような声で遠吠えを上げた。

すると周辺の野犬がキングの周りに集まってくる。野犬は興奮し口から泡を出し目は充血していた。

「ちっ！ 犬を呼んだのかよ！」

彰が毒づく。

そこに雷鳴のようなサブマシンガンの銃声が聞こえる。

「ギャン！」

「やほー、騎兵隊登場！」

それは水樹だった。

水樹は赤色の鎧を着ている。

「オノレ！ イケ、コロセ！」

キングが叫ぶと、犬は無辜の人々目掛けて襲いかかる。

彰と良一と水樹は誤射しないように気をつけながら犬たちをアサルトライフルとマシンガンで倒していくが数が二十頭近くいるため、カバーしきれない。

一人の女性に犬が跳びかかる。

寸前、犬は銃弾に弾かれ地面に倒れた。

「待たせたな！ 戦闘は五人揃ってからと言わなかったか？」

「そんな事言ったら公園にいる人達がやられていたよ、橘さん」

彰がそう言うと

「冗談だ。何事も臨機応変だ！」

と紳一郎は笑う。紳一郎は漆黒の鎧を着ていた。

「たくつ、冗談言っている場合かよ！」

彰はアサルトライフルを撃ちながらそう言うと

「冗談を言うくらいは精神的余裕が無いとイザって時に判断が鈍るぞ」

と紳一郎は真面目な声で諭す。

「確かに、精神的余裕は必要だ」

良一は冷静にそう指摘しながら犬たちを撃ち殺していく。

「吸血鬼は任せてください」

茜はスナイパーライフルでキングを狙撃する。

「ガアッ！」

それはキングの足に命中する。

「亜種吸血鬼ごときが、僕達DRに敵うと思わないでよね」

水樹は子どもらしい無邪気さでそう言いながら、サブマシンガンの弾丸を次々と吸血鬼に撃ちこむ。

銀の銃弾が何発も体に食い込んだ吸血鬼は再生能力も働かず次々と穿たれていく穴から血を吹き出す。

「オノレ」

「だから言ったでしょう？ あなたの寿命は今日だって……」

と、その時何処からともなく女の声が聞こえた。

「だれだ！」

紳一郎が叫ぶ。

女は虚空からバラ花壇の上に突如として現れた。

その女は血のように赤黒い髪と瞳をして真っ黒な法衣を纏っている。

「私は主に仕える死神。人間たちよ、この吸血鬼の魂を刈るのは私の仕事です」

「死神！？ だがそんなことは知るか。こいつをやるのが俺たちの今日の任務だ。ガラティーン！」

紳一郎はガウエイン卿が所持していた剣のレプリカを取り出すと、キングに切っ掛けかかった。

「構わないわ。私は魂さえ刈れば。神魔を断つは金色の鎌 来たれ！」

紳一郎のガラティーンと死神 樹の鎌は同時にキングを捉える。ガラティーンは吸血鬼の不死に対して純血の人間種だけが持つ対不死の能力を発揮して胴体をなぎ払い、鎌はその首を刈る。

そして、吸血鬼は塵となつて崩れていった。

その塵から青い光が飛び出して、樹の体に吸い込まれたのを、水樹は見た。

「あなたたちは戦略退魔軍の竜装騎兵ね。協力を感謝します。私だけでは、街の人の被害を抑えるのは難しかった」

「協力？ これは私たちの仕事ですよ、死神さん」

良一が触れたら凍りつきそうな声でそう言う。

「そう……だからあなたたちの夢見にこの吸血鬼の夢を見せた」

「夢見の夢を操る！？」

茜がやってきて驚きの叫びを上げる。

「ええ。死人が枕元に立つことがあるでしょう？ あれは私たち死神の仕業なの。それを応用して夢見に夢を見せたのよ」

「へー。すごいねお姉ちゃん」

水樹はただ感心する。

「俺たち戦略退魔軍はまんまとあんたに利用されたわけか」

紳一郎がそう言う

「そうね。そうなるわね」

と、樹は肯定した。

「気に入らないな……」

「でも、悲劇は阻止できたでしょう？」

「それも計算づくか？」

「ええ。この公園で今日死ぬのは吸血鬼だけの予定だったから……これも主の予定調和よ」

紳一郎と樹の会話は続く。

「神様か……イエスか？ ヤハウエか？」

「後者よ。イエスはただの人の子。人に愛を説いただけのただの人。もちろん、奇跡を行使するだけの霊力はあつたけど」

「仏陀は？」

「仏陀もただの人の子。悟りを開いて神になつただけだね」

「唯一神じゃないのか？」

「そんなのは人間が産み出した虚構……」

「そうか。参考になった。あんたは神の使いなんだな」

「ええ、そうよ」

「じゃあ、連行は勘弁してやる。また会うことはあるか？」

紳一郎の問に樹は微笑んだ。

「あるかもしれないわね……」

「そうか、楽しみにしておく」

「それじゃ失礼するわ」

そう言つと樹は虚空に消えた。

「行っちゃったね」

「そうだね」

水樹と彰が互いに頷き合う。

「さて、どうするリーダー。死神とやらについて上に報告するか？」

「いや、やめとこう。相手は神様のたぐいだ……人間にどうにか出来る相手でもないだろう」

「ですね。悪い人でもなさそうだし」

良一の質問に紳一郎が答え、茜が同意する。

「じゃ、戻るぞ」

紳一郎がそう言つと彼の全身を鎧っていた装甲がバイクへと変化した。

「お腹空いた。もーペコペコ」

水樹が空腹を表現する。

「そうだね。ラーメン食べようか？」

「どのの？」

「天下一品のこつてり食べましょ。おごつてあげる」

「わーい。大好き茜お姉ちゃん」

「どうせならみんなでいこう。俺がおくる」

紳一郎がそう言うと

「さすがリーダー。太っ腹！」

と彰がはやし立てた。

「俺は遠慮しておく。一人でゆっくり酒を飲みたい」

そういうと良一は一人で先に戦略退魔軍の基地へと帰っていった。

「協調性がないなあ、良一さんは」

茜がぼやくと

「まあ、そういう気分の時もあるさ」

と彰が明るく言った。

「まあ、俺たちも帰るぞ」

『了解』

そうしてDRの夜は終わったのだった。

新宿小夜曲（前編）

05：新宿小夜曲（前編）

バー『三途の川』

そこには多くの人外が集う。

それもそうだ。そのバーの主人が人外である死神だからだ。

死神は主と呼ばれる聖書系の神に仕える末端の神であり、末端とはいえ神である以上その存在が放つ神気は人外の者にとって心地よい。

そして、主人が妙齡の美女であるというのも理由かもしれない。

オーナーの名を冬風樹と言い、魔都新宿に巣食う善良な人外にとっては割と有名な存在である。

「でさ、樹さん。ソーマの工場がこの新宿の地下にあるって話でさ……」

そう言ったのは二十代後半の優男である。名を犬神誠と言う。

「犬神、それは確実な話なの？」

カウンターで酒を注ぎながら樹は尋ねる。

「概ね確実だな。もともと噂はあったんだ。ソーマはこの新宿を中心に売られている麻薬だ。だったら供給源も新宿じゃないかってね」
ソーマとは、ここ数年で流行り始めた麻薬の名だ。

幸福感と引きかえに、性格の凶暴化と、その服用者を軍用サイボーグ並みに超人化させる凶悪な麻薬だ。刹那的に生きる若者や、安価な戦力増強の手段を求める組織に愛用されているが、重度の依存性があり、服用し続けると脳機能が低下し、廃人になるなどの性質の悪い副作用がある。

「なるほどね……」

樹は大の薬物嫌いである。それは、薬物が人の魂を破壊するからだ。ことにソーマで破壊された魂は、死神でも回収できないほ

どにポロポロになる。

死神という一般的なには恐ろしいイメージが付き纏がちだが、実はとても慈悲深い存在である。

慈悲を持って魂を刈り、その魂を天上の神々の元へと導く。そしてその魂は救済を受ける。いわば死神とは神のために魂を刈る農夫なのである。

そしてなにより、死神がもたらす死の間際には、この世では一切味わえないほどの幸福感を味わうことができる。

酒よりも、麻薬よりも、セックスよりも、成功がもたらすものよりも強い快感と幸福感を味わえるのだ。故に死神に魂を刈られた者は幸いである。なにより、現し世をさまようことなく天上まで導かれるのだから。

そして樹は慈悲深い死神であるが故にソーマを許せない。犠牲者の魂は天上に導かれることもなく、かといって地獄に堕ちることもなく、ただ永久にこの世をさまよい続けるのだ。

「許せないわね」

故に彼女は怒る。

「で、具体的な場所はつかめたの？」

「いや、まだだ。でも、そのうちしつぽは出すんじゃないかな？」

なんせ、俺たち迷宮横丁の情報屋が総力を上げて捜査中なんだ。俺たちの情報収集能力は、どんな組織よりも高い。ことに、組織的に動いた場合はな」

やや自慢気にさういうと、犬神はビールを飲んだ。と言っても日本の法律上は発泡酒である。それはベルギー産のビールでも有名なものの一つ、ベルビュー・クリークという。チェリーを使ったビールでほんのりと甘く普通のビールが苦手なものでも飲みやすいと人気である。ことにそのフルーティーな味わいから女性には高い人気を誇る。

「期待しておくわ。で、私が依頼した魔術結社の件は？」

「そっちはいまいちだな。ソーマの売人を何人かとつちめてみたん

だが、末端は何も知らないな。俺が言うんだから間違いない」

犬神はサトリという妖怪である。人の心を読む能力があり、鬼の怪力を誇る。それ故魔都新宿で生きていられるのだ。

「魔術結社つてのがこれまた新宿の闇の深くに根付いてるんだよ。なかなか正体を見せないね」

「そう……加奈子……」

狂気に染まり邪神を召喚した妹がわりの少女のことを思い出す。

と、その時『三途の川』の扉が勢い良く開き、女が飛び込んできた。

「助けて！ 誰か、助けて！」

女はそう叫びながら店の中に駆け込む。

「大丈夫かい、姉ちゃん」

犬神は女を抱きとめて、抱き上げ、自分の隣りに座らせると、樹に「水を頼む」と言った。

それと同時に再び店の扉が勢い良く開き、ダークスーツの男たちが十名ほど入り込んでくる。

「穏当な雰囲気じゃないな……」

犬神は立ち上がると、女と男たちの間にたった。

店の客からは「やつちまえ犬神！」などと野次が飛ぶ。この店に集う客は皆犬神のことを知っている。それ故彼らは心配しない。

「どけ」

男が殴りかかるが犬神はそれをさっと避ける。

「右、つて考えただろ？」

「なっ！」

思考を読まれた男は驚愕する。

「なんで？ つて思っただろ？」

そして驚愕した隙にボディーパー。鳩尾に正確に決まる。

「犬神！ 彼らに死相は出ていないわ！」

つまり彼らはしばらくは死なない。

「要するに殺すなっただけだろ！」

犬神はそう叫ぶと二人目の男にかかと落としを喰らわせる。直撃を受けて男は沈む。

「犬神、俺も混ぜろ！」

と、そこに金髪の筋骨隆々の男が乱入した。

男の一人を正拳突きで沈める。

「なんだよ、邪魔すんな柴田」

男の名は柴田忠英。柴田勝家の傍流で鬼の血が混じった半妖怪である。彼は隔世遺伝で鬼の力に目覚めて新宿に寄付いた。

「まあ、そう言っなよ、つと」

柴田は回し蹴りで男の頭を強烈に蹴りつけて沈める。

「なんだてめえら」

「この新宿でこの柴田忠英の顔を知らないなんてお前ら潜りだぜ。

この喧嘩歌舞伎の大役者柴田様をよう」

喧嘩歌舞伎とはコマ劇場で上演されているフルコンタクトの殺陣が入った歌舞伎のことである。柴田は二枚目として有名な役者であった。

「関係ねえ、やっちまえ！」

半分ほどに減った男たちが一斉にかかってくる。

が、もちろん連携などとれていない。てんでバラバラな攻撃であった。

「甘い！」

「左、だろ？」

柴田と犬神は肩を並べてバラバラに攻めてくる男たちを各個撃破していく。こちらは連携がとれていて、柴田に寄ってくる男が三人いたら犬神がその内の一人を殴り飛ばして、もう一人の男にぶつけるといった具合である。

「ちっ、退くぞ！」

「覚えてやがれ！」

男たちは倒れた仲間を抱えて逃げようとするが

「犬神、柴田、確保して！」

樹の声が飛ぶと、二人はそれぞれひとりずつ倒れた男を捕まえる。

「この……っ！」

「いいから退くぞ！」

奪い返そうとする男をリーダー格の男が止めて、退却してゆく。

やがて全員が出ていくと、ヨレヨレのトレンチコートを着た身長二メートルくらいの男が立ち上がって、男たちを後ろ手にして手錠をかける。

「や、陣内刑事」

犬神がバツが悪そうに男の名を呼ぶ。

陣内孝介。新宿警察署の部長刑事である。

「ま、樹さんがいるからな……それに今は張り込みと称した勤務時間外だ。それに魔術事件以外は俺の管轄外だよ」

陣内は捜査五課 魔術結社専門の部署の刑事で、このような普通の犯罪や事件にはかかわらない。

「ああ、そういえば陣内さんがいたわね……」

樹は隅のほうで隠れるようにちびちびブラー・グランソラージュ・カルヴァドス（ブランデーの一種）を飲んでいた陣内（最初の一杯でかれこれ二時間くらいは粘ってる）を思い出し、先日秋月から聞いた魔術結社について尋ねてみることにした。

「どうしたい？」

「いえ、陣内さんの専門は魔術結社ですわよね？」

「ああ……そうだが？」

「幾つかの魔術結社についてお尋ねしたいことがありますて、暁の黄金星団、ブラックネス・スフィア、幸せの会、スター・ティア、銀色の羊教団。この五つなんですけど、この中にソーマを流している魔術結社があるようなのですが」

「んー、暁の黄金星団とブラックネス・スフィアはその意味では外れだな。幸せの会は小さすぎて実態がよくわからん。スター・ティアはかなり大きな組織で逆に実態が掴み切れない。銀色の羊教団は、イギリスの本来の意味での魔術結社と同じでお遊びの集団だよ。二

ユートンが魔術結社に入っていたように、紳士のステータスつてやつだ」

「じゃあ、幸せの会かスター・ティアということになりますかね？」

「ああ、そうだな。でも、それがどうしたっていうんだい？」

「そこに加奈子がいると聞きまして……」

「なるほど。ピエロの仮面の女ね。それなら、スター・ティアだな。スター・ティアの教祖がピエロの仮面の女らしい」

「ありがとうございます。これで、ようやく加奈子を救えるわ……」
安堵した様子で樹が言うと、陣内刑事は話題を切り替えた。

「それより、こいつらとそこのお嬢さんから話を聞いたほうがいいんじゃないかい？」

「そうね。犬神、悪いけどまずその女性から話を聞いてくれる？」

「了解。お嬢ちゃん、アイツらはなにもんだい？　そしてあんたはどうして狙われてた？」

「アイツらはスター・ティアのソーマの工場の警備の連中です。そして私はソーマの工場で管理を任されていました。でも、もう何もかも嫌になって逃げ出したんです。そういえば、まだ名乗っていませんでしたね。私の名前は大内恭子。25歳です」

「なるほど……ねえ、恭子さんとやら、その工場の場合分る？」

「犯罪者通りの地下に大型の工場が……」

恭子の言葉に樹はうなずき、「悪いけど今日はこれで看板よ」と店の客を追い出した。

残ったのは樹と何処からともなく現れたルヴァ、犬神と柴田、陣内刑事である。

「さて、恭子さんからだいたいのは聞けたから、その男たちに用はないわね。魔術結社の構成員らしいから、こいつらの処理は陣内警部に任せるわ」

「そりゃありがたい。俺は労せずして手柄を上げることになる」

「ちよ、陣内刑事そりゃないぜ。こいつらを捕まえたのは俺達だぜ」
犬神が口をはさむと

「あとで新宿署の方から金一封と感謝状を送るよ。で、樹さんはこれからどうするつもりなんだ？」

と陣内刑事は答えてから樹に質問する。

「もちろん、工場に乗り込んで製造プラントを破壊します」

「だったら、五課の特殊部隊高天原たかまがはらを送り込むぜ。魔術結社絡みだからな」

高天原 日本神道系の神々の名前をコードネームにつけた機械化特殊部隊。日本古来からの神術で、魔術結社の行使する魔術に対抗する能力を持っている。

ことに隊長の天照アマテラスは千年に一度の天才陰陽師として知られている。安倍晴明の再来と謳われているくらいだ。

「樹、我らが侵入したら敵の戦闘員はソーマを使ってくるだろう。

魂を刈ることはできんが、その分遠慮なく殺していい。金の鎌で魂を断つのだ」

「わかったわ。それじゃあ陣内刑事、この男たちと恭子さんをお願いします。彼女は新宿書で保護してください」

「了解。樹さんの頼みとあっちゃ断れないね」

「それじゃあ、三日後に踏み込みます」

「あいよ、ところで、俺はいつ頃死ぬのかねえ？」

陣内刑事が質問すると樹は

「まだまだ先ね。死の未来は見えていないわ……」

「そりゃ助かった。しばらくは無茶をできるな」

「とはいえ、運命を改変しようとする悪魔には気をつけて」

「どういうこと？」

「それは、私が死神になったことに関係するの」

そう言う樹は語り始めた。

死神になった夜のことを。

インターミッション 死神になった夜

06：インターミッション 死神になった夜

それは、十年前のことだった。

樹は重い小児喘息を患い、新宿中央病院に入院する中学三年生の少女だった。樹がルヴァと出会ったのは夏の終わりの夜 昼は暑く夜は肌寒い、そんな体に良くない季節だった。

深夜、個室のベッドで目を覚ました樹は、部屋に何者かが潜んでいるのを感じとった。

こんな夜中に、しかも個室に訪れるのは巡回の看護師ぐらいだが、その人物は懐中電灯を持っていてるわけでもなく、ただ暗がりにならずんでいた。

「誰？」

樹の問いかけに、その影は驚いたようだった。雰囲気伝わってくる。

「誰なの？」

答えはない。が、影に佇む人物の驚愕の気配が強まるのは感じられた。

「ねえ、あなたは誰？」

三度目の問いかけに、その人物は姿を現した。それは豊満な肉体を持ち、扇情的な服を着た金髪の美女だった。

「冬風 樹ね？」

その女は樹に名を尋ねた。

「そう、だけど……あなたは誰？」

樹の再度の問いに女はすっと目を細める。

「驚いた。やっぱりあたしが見えるのね。特異体質者なのね」

「特異、体質者？」

「そう。あたしのような人ならざる者の姿が見える人間のことよ。」

あたしはフェリス。いわゆる、悪魔と呼ばれる存在よ」

悪魔　その言葉に樹は驚きと疑問を持った。

「悪魔……？　悪魔があたしに何の用事なの？」

「あなたをね、殺しにきたの。あなたはこれから喘息の発作が起きて、死ぬのよ」

「殺しに？　何で私が死ぬの？　運命なの？」

樹の疑問に、フェリスは冷たい微笑で答える。

「運命？　いいえ、違うわ。運命じゃないからこそ、殺しにきたの。あなたはまだ死ぬ運命じゃない。だからそのあなたを殺すことで神の定めた摂理を歪めることができる。だから殺すの」

「随分と勝手な言い分ね。私を殺して、神様の定めた摂理というものを歪めて、あなたにいつたい何の特があるの？」

樹は、意外にも冷静な自分がいることに気がついた。

「それは、私たちの究極の目的に繋がることだけど、あなたに話す必要はないわ。だってあなたはこれから死に、その魂は地獄でサタンの下僕として生まれ変わるのでしょ」

そう言ってフェリスは冷笑する。その笑いに、樹はかっとなった。「サタンの下僕！？　勝手にそんなことを決めないで！　私はそんなものになるつもりはないわ」

「うふ。勝ち気なお嬢さんね。でも、あなたの意志は関係ないの。これは私が決めたことだから。それじゃあ、そろそろお話はおしまい。あなたはこれから発作を起こす……」

そう言つと悪魔は樹に手のひらをかざした。とたんに樹の呼吸が苦しくなり、咳が出始める。

苦しみ始める樹。ヒューヒューという呼吸音と、痰が絡むゼロゼロという音。そして激しい咳の音。

樹の指につけられたセンサーから発信される酸素濃度のモニターの数値がどんどん下がり、警告音が発せられる。そして足りなくなった酸素を求めて心臓が激しく脈動し、心拍数も上がり、こちらも警告音が鳴り響く。

警告音を聞いて看護師が駆けつける。酸素ボンベから樹の鼻に酸素を送りつけ、カテーテルで痰を吸い出す。そしてそれだけでは足りない判断し、点滴を持ってくると針を樹の腕に刺す。そして痰をとりながら吸入が樹の口腔に送られ、樹の苦痛を和らげる。しかし

「無駄な努力ね……」

フェリスが笑いながら樹に送る力を強める。その時だった、樹の耳に、その場にはないはずの男の声が聞こえたのは。

「そうはさせん」

その声とともに、樹に暖かい力が送られてくる。途端に樹の呼吸が楽になった。

「何者!?!」

フェリスが叫んでその声の主を振り返る。そこには金髪で顔のよく見えない、黒いマントをつけた男が佇んでいた。

「我はルヴァ。死神だ。悪魔よ、神の摂理を曲げることはまかりならん」

死神という言葉に、フェリスは激昂して叫んだ。

「死神が人の命を救おうというの？ 死神のくせに？ お笑い草ね」

「勘違いされては困るな」

ルヴァは苦笑する。

「死神は神の定めた摂理の通りに寿命がきたものの魂を刈り取り天上へ導くのが仕事だ。摂理を歪めて死を与えるのは許されざることだ。悪魔よ、汝のしようとしていることを見過ごすわけにはいかん。神魔を断つは金色の鎌、来たれ！」

ルヴァは金色の鎌を召還すると、フェリスに切りかかる。

「くっ！ 乱暴な殿方は嫌われてよ」

その鎌をフェリスは伸ばした爪で受け止める。

「あいにくと悪魔に好かれる気はない」

ルヴァが鎌に力を込めると、フェリスの爪が折れて、折れた後から瘴気が漏れだした。

「おのれ、死神ごときが！」

フェリスが瘴気の玉をルヴァにとばすがルヴァはそれを鎌で切り裂いた。

「死神も神のはしくれ。おまえのような下級な悪魔に遅れはとらんよ」

「言ってくれるじゃない。畏れられることでは悪魔以上の死神のくせに！」

ルヴァの斬撃を受けて、フェリスの左手が消失する。

「くっ！」

フェリスが美しい顔を苦痛に歪める。

「どうする、悪魔よ？ この少女の運命に介入するのをやめると言うならばこのまま見逃さないこともない」

「ご親切にどうも！ ここは忠告に従わせてもらっわ。でもね死神、私を見逃したことで、必ず後悔するわよ」

フェリスは捨て台詞を残して姿を消した。途端に樹の呼吸が楽になる。

「さて、樹よ、少々おまえの運命に介入させてもらっぞ」

ルヴァはそう言うと樹に向けて手のひらをかざし、力を送り込んだ。樹の病状がそれに伴い自然に回復してくる。

「樹さん、大丈夫？」

落ち着きを取り戻した樹に、看護師が訪ねる。

「はい、大丈夫です」

樹は弱々しい声ながらもはっきりと答えた。

「そう、よかつたわ」

酸素濃度も心拍数も平常のレベルに落ち着いている。看護師は安堵したようにため息をつく、樹の点滴を調整して部屋を出ていった。

「ありがとう……死神さん」

樹の呟きに、ルヴァが驚愕の表情を見せる。

「我が見えるのか？」

「ええ。悪魔が言うには、私は特異体質者なんだって。二人の会話も、戦いも、私はちゃんとわかっていたわよ」

「そうか……これが我の運命か」

感慨深げにルヴァがため息をつくのに、樹は首を傾げた。

「どうということ？」

「主は我とおまえを引き合わせたのだ。樹、おまえは死神になるつもりはないか？」

「どうということ？」

樹はルヴァの唐突な言葉に、再び首を傾げる。

「健康な体がほしくないか樹？ 発作で苦しまなくてもいい、同じ年頃の子供のように駆け回れる、そんな体がほしくないか？」

「欲しくないといったら嘘になるけど、死神さんはそんなこともできるの？」

そう聞かれ、ルヴァはしばし間を置いてから答えた。

「できないことはない。だが、そのためにはおまえが我と契約して死神になる必要がある。そして我と共に死にゆく魂を刈り天上に導くのだ」

「私が、死神に……？」

ルヴァの言葉が飲み込めない。自分が死神になる？ いったいどうということだろう？

「ごく希に、人ならざる存在を見ることができると特異体質者と死神が契約を結び、その仕事を代行することがある。そして特異体質者は、大抵体に何らかの欠陥を抱えている子供だ。死神はその子供の欠陥をなくす代わりに契約を結び、仕事を代行させる。それによってその子供は不死の死神となり、神の農夫となって魂を刈る」

「魂を刈る？ 人を殺すの？」

樹の疑問にルヴァは首を振る。

「そうではない。寿命を迎える者に死を宣告し、寿命が来たら迷わぬように天に導いてやる。それが死神の仕事だ」

「天に、導く？」

「そうだ。この世を彷徨わぬ様に、天まで導く。そしてその魂はお前たちが天国と呼ぶ場所で一定の期間を過ごし、後に転生する。どうする樹？ 無理強いはいしない。が、定めに従うつもりがあるならば、我と契約せよ」

樹はしばらく考え込んだ。

死。死神。魂を刈る。天に導く。人の命を奪うことは、現実感がないが嫌悪感があった。だが、健康な体というものも魅力的だった。樹は、幼いころからその日常のほとんどを病院のベッドですごしてきた。学校に行くことはあっても極まれ。常に発作の恐怖との、死の恐怖との戦い。

「不死の死神となり……」

樹はふとルヴァの言葉を思い出す。

不死 それは彼女にとって健康な体以上に魅力的だった。死の恐怖に怯えることのない日々。それは、誰もが望みながら手に入れられぬもの。それを得ることができるのは、とても素晴らしいことに違いない。樹はそう思った。

「わかった。私死神になる……」

それは、軽い気持ちだった。だが、樹は自分の考え違いをすぐに思い知らされることになる。

「そうか……では、契約を行おう」

ルヴァはそう言うのと樹の元に歩み寄った。

「戒めを絶つは赤の鎌……来たれ」

赤色に輝く鎌を召喚すると、ルヴァは樹の体めがけてそれを振るった。

「きゃっ！」

樹が悲鳴を上げる。だが、それは樹の体とベッドをすり抜け、一回転してもとの位置に戻る。

「これでお前と現世とを結ぶ戒めの糸は絶たれた。お前の寿命……病死もこれではなくなった。では、手を伸ばせ、樹」

「ん……？ こう？」

おもわず両手をまっすぐ前に伸ばす。

ルヴァがその手に触れると空間が光りだした。樹は思わず目を閉じる。すると耳鳴りのような音が聞こえた。

しばらくたつて光りと音が消えると、樹は恐る恐る目を開いた。何かが変わったか確認したくて周囲や自分の体を見るが、特に変わったことは見つからない。

「契約は完了した。樹、これでお前は死神となった」

「これで契約が終わったの？ 何も変わってない気がするけど……」
そういう樹に、ルヴァは優しい声で応えた。

「気付かぬか、樹。お前を蝕んでいた苦痛がなくなっていることに
そう言われて、全身の感覚を確かめる。確かに、樹を蝕んでいた
はずの苦痛が消えてなくなっていた。

「……うん。そういえばそうね。全然痛くもないし苦しくもない。
これが健康な体なの？」

「そうだ。お前は不老不死となり、健康な体を手に入れた」
健康な体、それは樹には魅力的に響いた。

「それでは早速だが、お前には仕事を果たしてもらおう。今夜私は、
宣告済みの魂を刈る予定だった。お前には最初の仕事として、その
魂を刈ってもらおう」

その言葉を聞いて、笑顔が消えた。そして沈黙が部屋を支配する。
やがて、樹はゆっくりと口を開いた。

「そっか、私死神になったんだっけ。ねえルヴァ、どうしても殺さ
なきゃだめなの？」

「それが死神だ。何より、そのものは苦しんでいる。苦痛から解放
してやると考えればいい」

「でも……」

樹が反論しようとする、ルヴァはそれを遮って言葉を続けた。

「真由美という娘は知っているな。彼女が、お前の最初の仕事のタ
ーゲットだ」

ルヴァの言葉を聞いて樹は驚いた。それは彼女が良く知っている名

前だった。

遠坂眞由美。

中学二年生の少女。

比較的年の近いこの少女は、樹にとって数少ない友達といえた。だが、ここしばらく彼女には会っていない。それは彼女の喘息の発作が酷くなり、酸素テントの中に入れられているからだだった。

酸素テントとは、喘息の発作で呼吸が難しくなった患者に対して用いられる治療法の一つで、テント内に薬と酸素を噴霧して症状の改善を求めるものである。

ただ、この治療法の欠点として、非常に酸素テント内が高温になるため、同時に患者の体力を奪うことにもなることがあげられる。下手をすればかえって症状が悪化し死亡につながることも少なくない。それは、この眞由美という少女も例外ではない。

「彼女はこの一週間ほど、呼吸困難のためにまともに睡眠を取っていない。幻覚を見ているような様子でもあったな」

「そんな。ひどい……」

樹は喘息という病の苦しみを十分に知っている。友人が苦しんでいるということは理解できた。そして、それがおそらくひどい苦しみだろうということも想像できる。

「彼女がお前の友であったのは偶然だ。だが、彼女は間もなく定めを迎える。最初にも言ったがな、我らは魂を刈り、神の元へと導く農夫。ただ、定めが来たものの魂を刈るのが仕事だ。そして、死神が与える死は慈悲。お前の友を苦痛から解放してやるのだ。彼女が味わっているのは、まさに死以上の苦痛」

ルヴァの言葉に、樹は眞由美の苦しみを自分も味わっているかのような感覚を受けた。

息が苦しくなり、ヒューツ、ヒューツ。ゼイゼイ、ゼイゼイと鳴る。呼吸を繰り返すたびに胸が痛い。まるで胸の骨が折れているのではないかと思うほどの苦痛。それゆえに眠れず幻覚を見る。

「ひどい……苦しいんだよね。辛いんだよね。ごめんね、ごめんね。」

今、楽にしてあげるからね……」

気が付けば、眞由美の病室に入っていた。樹は、彼女が苦しんでいる姿を見てひどいショックを受けた。それと同時に、彼女の苦しみを止めることができるということに、微かな安堵と、安堵する自分に対する戸惑いを覚えていた。

「ねえ、ルヴァ。どうすれば眞由美ちゃんの苦しみを止められるの？」

「我と一体化せよ。我に命ずるのだ。力をよこせ、と」

ルヴァは静かに語る。その語り様が、樹に信頼感を与えた。

「ルヴァ、力を」

「うむ」

ルヴァが短くうなずき、次の瞬間には光りだした。その光は樹の周囲をめぐり、ゆっくりと舞い降りてくる。そして、樹の服が病院のパジャマから黒い法衣に変わる。髪と瞳は血のような赤黒い色に染まっていた。そして彼女の肩には、瞳も爪も毛並みも黒い、真っ黒な猫が乗っていた。

「それでいい。そして黒き鎌を呼ぶのだ。来たれ……と」

猫が、しゃべった。

「あれ？ ルヴァ、あなた猫になっちゃったの？」

「うむ」

猫が、うなずいた。

「力の大半をお前に与えたからな。何か地上の生き物の姿をとる必要があったのだ。そして、使い魔といえば猫だろう。この姿が気に入らないのであればフクロウでも蝙蝠でもなんにでもなるが」

「……猫のままでもいいわ。黒き鎌よ、来たれ……」

手が、自然と空中に上がる。その手は実体化した鎌を握り、そして鎌の重さでゆっくりと下がっていった。

「魂を狩るは黒の鎌……その鎌は何も傷付けぬ。ただ魂のみを刈る。

さあ、樹よ、お前の友に安らぎを」

「わかったわ。ごめんね眞由美ちゃん。私はあなたの魂を狩って、

健康な体と永い命を手にするの。ごめんね……ごめんね……」

「Be in the grip of Death・死神に見初められた娘よ、お前の苦痛をすべて取り払ってやるう。そして、神の元へと導こう。我らは慈悲深い」

樹が、鎌を大きく振り上げた。

「うわあああああ！！」

その叫びとともに鎌が振り下ろされる。鎌を通して手に感じるかすかな抵抗感。それを押し切って鎌を振り抜くと、ふっと抵抗感がなくなる。鎌が手から離れて宙に浮かび、虚空へと消えた。

「見ろ、この少女の顔を」

ルヴァに促され、酸素テントの中の眞由美を見た。

先ほどまで苦しみで歪んでいたとは思えないほど安らかな顔。それは彼女の魂が死神 樹によって魂が刈られたことを意味していた。

「まるでただ眠っているだけみたい……これが魂を刈るっていうことなの？」

樹は肩に乗っている猫に向かってしゃべる。

「そうだ。そして右手を出してみよ」

言われて右手をそつと前に出す。するとそこに光が集まり、青く光る暖かいものが手のひらに乗った。

なぜか、それが愛おしい。

「それがこの娘の魂だ。そしてそれを、胸に宿すがいい」

ルヴァの言葉に従って、青い光をそつと自分の胸に押し当ててみた。

光はいっそう輝きを増しながら、樹の胸の中へと入っていく。胸が温かくなった。そして、なぜだか涙がこぼれた。

光が樹の胸の中に完全に入ると、輝きも消えた。

「これでお前は真に不老不死だ。世界の終わるそのときまで、我とお前は魂を狩り続けることになるだろう」

「そう……でもあまり実感がないわ。何でかしら……」

「我とて人間の不老不死がどんなものかはわからん。ただ、我は幾千万の時間の流れの中を生きてきたのだ。それはこれからも続くだろう。故に、お前も死神として悠久の時を過ごすことになる」

「そっか……すごい罪悪感。私、この手で人を殺したのよね。自分が生きるために」

罪悪感が拭えない。

自分が直接魂を刈ったという事実、その魂で病から解放されて自分が不老不死になる事実、それこそが拭えない罪悪感。

心が重苦しい。重圧に耐えられずうつむいた。

「それが生きるということだ。命というものだ。どんな生き物であれ、他者の命を奪わずには生きていけない。それが肉体を持つ生き物の定めだ」

一見正論に聞こえる。だが樹は納得できなかった。

「でも、私は……」

言葉が詰まる。

「言っただけだ、苦痛から解放したのだと」

ルヴァが淡々と言う。樹には、それが心無い言葉に感じられた。

「こんな思いになるなんて分からなかった！ 友達を……友達を殺しちゃったのよ。真由美ちゃんの家族だって悲しむに決まってる。

真由美ちゃんはいいい子だったのに。生まれた頃からほとんど病院にいて、虫を殺したことも花輪を作ったりして植物を殺したことも無い、何も裁かれる罪も無い、純粹で、なのに苦しんで、苦しんで、苦しみに耐えて、その拳句に中学二年生で……死んじやった。殺しちゃった。あたしが殺しちゃったのよ。おかしいよ、おかしいよ。悪いことしても裁かれないでいる人だっているのに、何で真由美ちゃんが、真由美ちゃんを……」

心が負荷に耐え切れずオーバーヒートする。最後のほうは、嗚咽交じりになっていた。そして、静かに泣き出す。不条理、不合理、不公平。そんな言葉が樹の心を占領している。

「それが彼女の定めだったのだ、仕方あるまい」

この死神には心が無いのだろうか？ 樹はそう思った。

「定めつて何？ 誰が定めたの。何でこんなひどい定めを、眞由美ちゃんに背負わせたのよ！」

「神だ……天にいて我らを使役する神。彼らが寿命を設定する。無論、寿命以前に自殺などで死んでしまったりする者もいるが、それは例外だ。寿命を迎え、死神が魂を刈る。そして刈った魂を天へと導く。何度も言うが、それが我らの仕事なのだよ樹。それよりも人が来る、おしゃべりはここまです。この姿の我らは普通の人間には見えないはずだが、おまえに見られたという前例がある。姿を消すように念じる」

樹は姿が消えるように念じた。すると一瞬彼女の視界が歪んで、しばらくしてから視界は元に戻った。自分の体を見てみると手足や体が半透明になっているのが見えた。ルヴァの姿も半透明だ。

『よし、完全に消えたようだな』

頭の中からルヴァの声が聞こえてくる。

「ルヴァ、なにこれ。テレパシー？」

思わずルヴァに訪ねるがルヴァは樹を窺めるように言った。

『心で話せ。しゃべったら万が一人間達にも聞こえるかもしれない』

『わかった。これでいいの……かな？』

『そうだ、それでいい。それよりも、やはり人間がこの部屋に来たみたいだぞ』

ルヴァの声にドアの方に目を向けると、看護師と医師が入ってきた。脈拍と呼吸を確認し反応がないことを確認すると蘇生術を行う。

『無駄なことをするものだな……』

ルヴァが非常な宣告をした。声の聞こえない人間に向かって。

『その少女の魂はすでに刈り取られた。もはや如何なる手段を尽くしても蘇生はできません』

『ルヴァって本当にデリカシーに欠けるわね。最低』

樹の言葉に、ルヴァは少し思い悩んだ。

『人間の心の機微というのはいまいちわからん。これからおまえと

ともに勉強するでしょう』

『そうね。それがいいわ』

樹がそう頷いたとき、医師が看護師に家族に連絡を取るよう命じた。指示を受けて一人の看護師が病室を出て行く。

『樹、そろそろ出ようではないか。この娘の家族が来る』

その言葉に、樹は一瞬迷った様子を見せた。だが、その後意を決したのか、はつきりと言った。

『だめよ。私は眞由美ちゃんの魂を刈ったんだもの。最後まで見届ける義務があるわ』

『そうか。好きにするが良い』

『うん。好きにする』

無益と感じたのか、医師は蘇生術を中止した。時計を見て、死亡時刻を確認する。そして看護師とともに部屋を出て行った。

『彼女の家族が来るまでまだしばらく時間はあるだろう。先ほどの続きを話そう』

『何？ いいわよ』

樹は、足下のルヴァをじっと見た。猫は大きくあくびをすると、思念波を使って話し出した。

『何度も言ったがな、樹、我ら死神の仕事は定めにある者の魂を狩り、天の国へと送り届けるのが仕事だ。そこには、苦しみはない。

病もない。永遠の楽園だ。そこで彼らは幸せな日々を過ごす。生は泡沫の夢。肉体は魂の器。生命の本質はそこにあるのだが、一部の者を除いて、それに気付いた者はいない』

樹は一瞬考えてから、首を真横に振った。

『だったら何のために人間は生まれるの？ ずっとその楽園にいればいいじゃない。なんでこの地上に生まれるの？』

『それが主の定めた摂理だからだ』

『そう……』

『そうだ。だから、彼女と彼女の家族との別れが終わったら、彼女の魂は天の国へと連れて行かねばならん。無論、その一部がおまえ

の命となるわけだがな』

『でも、やっぱり納得できない。殺してから、言うことじゃないけど……』

ルヴァの言うことはわかる。理解もできる。だからこそ、それが納得できないのか。いや、納得して魂を刈ることが当たり前になるのが怖いのだろうか。だから納得したくないのかもしれない。心のしこりがとれないのは、そのせいではないか？ 樹は自問自答する。『まあ、今すぐに考えを変えるのは無理だろうが、時間は無限にあるのだ。ゆつくりと、ゆつくりと答えを探していけばいい。そのための永遠の命だ』

『うん。人、来たみたいだね。家族の人かな？』

廊下から気配がして、その気配はこの部屋へと向かってくる。やがて扉が開いて、眞由美の家族と医師たちが入ってきた。

母親は、眞由美の遺体にすがって泣いた。父親は、必死に涙をこらえながら医師と話をしていた。

ふいに、母親が叫びだす。

「ごめんね、ごめんね。苦しかったでしょう。こんな体に生んでごめんね。ごめんね眞由美、ごめんね何年間も苦しませて……」

言葉が途切れる。そして、再び泣き出した。

『最後まで見届けるとは言ったけど、悲しんでいる家族の姿をみると、決意が揺らぐわね……』

果たして自分には最期まで見届けることができるのか？ 家族が悲しむ様子を見ていると、不安になる。

『それが魂を刈る者の定めだ。このような場面はいつも見ている。まあ我には人の感覚は分らんがな』

『そうなんだ。眞由美ちゃんの家族、悲しいのね。人が死んだとき周りがどんな悲しみを抱くのかを、あたしはちゃんと覚えていなくちゃならないわ。これからも魂を刈り続けるなら……』

『刈るだけではない。天へと導くのも我らの仕事だ』

『そうね。眞由美ちゃんを天国に連れて行かないと……。でも、ど

うすればいいの？ ルヴァ」

『まあ、さて。この人間達が出て行ってからにしよう。最期まで見届けるのだろうか？』

そう言われて樹は頷いた。最期まで見届ける。そう決めたのは自分なのだと思い出した。やがて真由美の家族と医師たちが部屋を去る。そこに残ったのは真由美の遺体。魂を刈られ、空っぽになった魂の器。そしてそれを見ている人外のものが二つ。ルヴァと樹だ。透明化状態を解除して真由美のベッドの傍らに立っている。

「そろそろ、この娘を天へと連れて行こうか。最初は我が案内せねばなるまいが……まず、銀色の鎌を呼び出すのだ。天への道拓くは銀の鎌」

「うん。銀の鎌よ、来たれ」

樹の呼びかけに応じ、宙に銀の鎌が現れる。樹はそれを手に取ると、前方の空間を狙ってそれを振るった。

刃物と刃物がぶつかり合うような音が響き、空間に閃光が走る。閃光が消えると、そこには裂け目が現れていた。

「よし。天への道が開いた。我が先に歩く。あとをついてくるが良い」

ルヴァがジャンプしてその裂け目に入り込むと、樹も恐る恐る中に入ってしまった。

立った感触が希薄で、ふわふわ浮いている感じがする。その空間は灰色で、いかにも異次元と言った様子である。

「恐れることはない。ここは神の陣営に属するものだけが通ることができる通路だ。危害を加える存在はおらぬよ」

それを聞いて樹は安心した。だが、神聖な空間というにはほど遠い外見だ。そのことをルヴァに告げると、ルヴァは笑って言った。

「ふむ。まあ、人間のイメージする教会や神殿のようなイメージとは異なるな。だが、ここは確かに天の国へと直結する道だ。心配しなくても良い」

そういうとルヴァは迷う様子もなく道を歩き始めた。仕方がない

ので樹も黙ってルヴァの後をついて行く。しばらく歩くと、銀色の扉が目の前に現れた。

「終点だ」

ルヴァが告げる。

「我が名はルヴァ、この者は樹。死神の使命と権限において開門を命ずる！」

ルヴァが叫ぶと、銀色の門がゆっくりと開かれた。光が門の向こうからあふれてきて、樹はあまりの眩しさに目を瞑る。

「もういいぞ、樹」

ルヴァに言われて樹は恐る恐る目を開ける。光は消えており、門の向こう側にはギリシャの神殿のような空間が見えた。

「ここが、天の国？」

「そうだ。正確にはその入り口。死神が魂を神々へと渡すための部屋だ。さあ、中に入るのだ」

三步ほど足を進めて中に入ると、背後で門が閉まって消えていくのが感じられた。

「ルヴァ、門が消えたよ……」

中を見たところこの神殿のような空間の中には誰もいなくて、柱だけが一定の間隔で並んでいるに過ぎない。初めての場所で出口が消えてなくなってしまうというのは気持ちがいまいことではないだろう。

「案ずるな、出口は別にある。それよりも、奥へ進むのだ。この先には我ら死神を束ねる長がいる。そこでお前の友、真由美の魂を楽園へと送るのだ」

「……わかった」

樹は少し迷ってから答えると、ゆっくりと歩き始めた。歩きながら樹は周囲を観察するが、壁と柱の他には何もなく、明かりが灯されているわけでもないのにずっと前方まで視認できるほどに明るい。

「不思議な空間ね」

「そうか？」

ルヴァが意外だといったように答える。ルヴァにしてみれば長年親しんできた光景だ。取り立てて違和感を覚えるようなことはない。「まあ、初めて来たのだからそう思うのだろう。いずれ慣れる」

やはり死神は人間とは感覚が違うらしい。樹がそう思っただけでルヴァに話しかけるのをやめようかと考えたそのとき、目の前に見える風景が変わった。

「さて、ここが目的地だ。長よ、死神ルヴァとその契約者樹、清き魂を持ちて参りました」

そこには、豊かな銀色の髪と大空や海のような暖かな青色の瞳をした美しい女性が立っていた。整った顔立ちは名人の手で作られた彫刻が命を持ったような印象を受ける。

「ご苦労様です」

その女性は穏やかな声でねぎらいの言葉をかけると、次の言葉を促すように猫となっっているルヴァを見た。

「長よ、この者は人間の少女、樹。故あってこのたび我と契約し、新たな死神となりました。樹よ、このお方が我ら死神の長にして命を司る女神マアサ様だ」

「はじめまして、マアサ様。ルヴァと契約して死神になりました、樹と言います。よろしく願います」

「はじめまして、樹。私は、ここで死神が刈り、導いてきた魂を楽園へと送り届けるのを仕事としています。そして、死神達の管理もね。早速で悪いのですけれども、あなたの連れてきた魂……眞由美だったかしら？ 彼女の魂を渡していただけ？ 念じるだけで大丈夫よ」

「はい」

樹は友人の魂が目の前にいる女神マアサの手に渡るよう念じる。すると樹の体から青い光が抜け出してマアサの目の前で止まった。そしてそれは、人間の少女……すなわち眞由美の姿をとる。

「眞由美ちゃん……」

彼女の魂を刈り取ったことを思い出した。苦しんでいるとは言え、

友人だった……

「樹ちゃん、ありがとう」

樹の自責の念を察したのかどうかは分からない。だが、人の形をした眞由美の魂は、樹に対して礼を言った。

「パパとママに伝言を頼んで良いかな？ 短い間だったけど、二人の子供でいられて幸せだったよ……って」

「眞由美ちゃん……」

樹は涙を流しながら頷く。

「彼女の魂は全てを知っています。樹、彼女はあなたのことを恨んでなんかいませんよ。あなたは悔やむことも恥じることもありません」

「はい。でも、マアサ様はなんで……」

なんで私や眞由美ちゃんのことを知っているのだろうか？

「私は職能上、全ての死神がどこで何をしているのかを知ることができます。だから、あなたが病で苦しんでいたこと、ルヴァと契約したこと、そしてあなたと同じように病に苦しむ友人の魂を刈ったこと……全て分かっています。そしてあなたが、友人の魂を刈るに当たってどのように苦しんだのかも。だからもう一度言いましよう。悔やむことも恥じることもないと。あなたは病に苦しむ友人の魂を救ったのであって、人を殺したわけではありません。今のあなたにはまだ分からないことかもしれないませんが、その二つには大きな隔たりがあるのです。そしてあなたの友人は、あなたのことを憎んだり恨んだりしていません。先ほど彼女は、あなたにありがとうと言いました。魂は嘘をつけません。彼女があなたに感謝をしているのは偽りではないのです」

「……はい。はい」

樹は涙をこぼしながらただただ頷いた。マアサはそんな樹を、微笑みながら見つめていた。

「マアサ様、これから眞由美ちゃんは、幸せになれるのですか？」

「勿論です。これから彼女が行くのは楽園……なんの悲しみも苦し

みもない世界です。ご安心なさい、あなたの苦しんだ思いは、無駄にはなりません。そして、あなたが死神になるに当たって思い悩んだこと、その答えもいずれ分かるとお約束しましょう」

「……わかりました。まだいろいろと分からないことだらけですけど、分かりました。マアサ様、眞由美ちゃんを、よろしく願います」

「ええ。それが私の仕事ですから。それでは、私はこれから彼女を連れて行きます。すぐに戻りますから、あなた方はここで待っていてください。渡したいものがありますから……」

「はい」

「では、行きましようか、眞由美」

マアサは眞由美の手を引き、もう一方の手を虚空にかざす。すると次の瞬間にマアサと眞由美の姿は消え、樹とルヴァだけが残った。

「……眞由美ちゃん、ありがとって、言ってたね」

「そうだな。お前も思っていたはずだ、こんなに苦しいなら死んでしまった方が楽ではないかと。彼女も同じことを思っていたのだろう。マアサ様が言ったように、魂は嘘をつけない。彼女は、死んだことを悲しんではおらんしお前のことを恨んでもいない。ただ、父と母に対する愛情と別離への悲しみがあつた。だからお前に伝言を頼んだ。それだけのことだ」

「そっかあ。でも、伝言ってどうやってたら良いんだろう。まさかそのまま会って伝えるわけにも行かないよね？」

「おそらく、夢で伝えることになるだろう。古来より、死者が枕元に立つというのは良くある話だ。我らはその手助けをすればよい」

「手助けって、それこそどうやるの？」

「それは……」

「それは、夢見石というものを使います」

ルヴァの声に、マアサの声が重なった。

「マアサ様」

「お帰りなさいませ」

「ただいま、樹、ルヴァ。本当にすぐに戻ったでしょう?」

そういうと、マアサは笑って見せた。そして、懐から二つの虹色に輝いた石を取り出す。

「これが夢見石と言います。魂のメッセージを石の形に結晶化させたものです。樹、これを眞由美の両親の枕元に置きなさい。そうすれば、彼女の伝言が伝わります」

マアサは手を差しよせ、その石を樹に手渡した。

「わかりました。眞由美ちゃんのメッセージ、必ず伝えます」

「良い娘ね。普通の死神は、魂を刈ったあとのアフターケアなんて考えつかないようなものだけど、あなたが人間だったからかしらね……樹、これからいろいろとつらいこともあるでしょうけど、負けないでくださいね」

「……はい」

なにやら含むものがありそうなマアサの言葉に、樹は短く答えた。そしてルヴァが樹に退出を促す。

「うん。それではマアサ様、失礼いたします」

「そうね。またお会いしましょうね、樹。あなたが死神であり続ける限り、私とあなたは何度もここで会うことになるでしょうから。そうそう、あなたに称号を差し上げましょう。三代目の死の女神、Goddeathの称号を……」

「Goddeath、ですか?」

聞き慣れない言葉に、首をかしげる樹。それに対してマアサは微笑みながら説明をした。

「God、すなわち神。Goddess、すなわち女神。そしてGod of Death、すなわち死神……この三つを掛け合わせた言葉遊びのようなものね。樹、あなたはこれからGoddeath、死の女神を名乗りなさい」

「Goddeath……死の女神……」

繰り返すように呟く樹に、マアサが微笑みながら告げる。

「死神は慈悲を持って魂を刈り、また、人の世界にさまよえる魂を

導く神の農夫です。戦士の魂はワルキューレが導きますが、普通の魂は死神が導くものです。忘れないでください、死神は慈悲の心を持つものです……」

「……慈悲を持って、魂を導く。分かりました。Goddeathの名に恥じないようにがんばります」

「ふふ……良い娘。それではおゆきなさい、樹、ルヴァ。今このときにも、救いを求める命は数多くいます」

「畏まりましたございます」

「わかりました。帰ろう、ルヴァ」

樹に促されたルヴァは、彼女を先導するように歩みを進める。しばらくすると扉が開いて樹とルヴァを待っていた。ルヴァが軽く跳躍して中に入り、現世へと戻る通路を歩き始めると、樹もそれに従って通路に入った。二人は言葉を交すことなく通路を歩いてゆく。やがて光が差し込み、出口が見え始めた。

「どこに出るの？」

眞由美の病室だろうか？ すでに霊安室に移されたかもしれないが、眞由美の亡骸と対面するのはまだ樹には厳しいものがある。それを感じ取ったのか、ルヴァがこう言った。

「お前が望むところを念じるがいい。家だろうが、海の中だろうがな。この扉の出口は不確定の集合体。全ての場所であり全ての場所がない」

「どう言うこと？」

「とにかく行きたいところを念じればいい。病院の自分の部屋に戻りたいのならばそれを」

「わかった」

樹は自分の病室をイメージする。清潔なベッドと遠隔授業に使ったノートパソコン、数冊の小説と漫画……エレベーターが停止した時のような違和感があり、気が付くと樹はすでに自分の病室ベッドの上にいる。

「……夢……だったのかな？」

黒いローブではなく着慣れた病院のパジャマ。赤黒くない、普通の黒い髪。そして朝日が差し込む窓辺。見慣れた風景に、樹は先ほどの出来事は夢だったのではないかと疑いを持った。

「夢ではないぞ」

声が出た方向を見るとそこには死神の姿のルヴァが浮いていた。

「あの後お前は我と分離すると、力尽きてベッドに倒れた。初めてのことはかりだったからな、相当疲れたのだろう。三時間ほど眠っていた」

「そっか。すこしだけ、夢だったらいいなと思ってた。でも、現実だったんだ……」

「現実だ。良くも悪くもこれは現実だ。現実から逃れる術はない」

「……酷いこと言うのね、ルヴァってば。それで、私はどうすればいいのかしら？ 死神になったと言っても、いったい何をすればいいのか全然分からないし……」

「普段通り過ごすが良い。夜まではな。夜になったならば、眞由美の親の枕元に夢見石を置きにい。当分の仕事はそれだけだ。眞由美の家は我が昼のうちに調べる。お前は何事もなかったように振る舞っているが良い」

「わかった」

樹がそういつたとき、枕元の時計がかわいらしいメロディで自己主張をした。六時五〇分。朝食の十分前の知らせと起床を促す目覚まし時計だ。

「ご飯の時間だ。私、ご飯食べに行ってくるね」

ルヴァが頷くと、樹はベッドから降りてスリッパを履き、軽く髪を整えてから食堂へと向かった。

夜

樹はルヴァと一体化して死神となり、新宿の摩天楼の上を飛び回っていた。

新宿中央病院から眞由美の家のある高田馬場の外れまで、樹は時

速に換算して百キロほどの速度で飛んでいた。初めての飛行で最初は乗り物酔いのような感覚になったものの、いまではかなり快適に空中を進んでいる。

高田馬場駅を通り過ぎてルヴアの指示のままに進むと、住宅街にさしかかった。そしてルヴアはその中の一軒に降りるように言った。速度を殺し、ゆっくりとその家の屋根に降り立つ樹。家の明かりはすでに消えている。真由美の両親はすでに寝ているのだろう。

「それでルヴア、どこから入ればいいの？」

尋ねる樹に、ルヴアはベランダに降りるように指示する。樹がベランダに降りると、ルヴアは会話を念派に切り替えた。

「死神は物理的な法則を無視できる。故に壁をすり抜けることも可能だ」

樹の返事を待たずに真由美の家に侵入する。

「あ、待って！」

樹も慌ててルヴアを追う。取り立てて壁（この場合はガラスだが）をすり抜けると言うことを意識しないままに部屋の中に入った。

「ここは……真由美ちゃんのお部屋だわ」

明かりをつけなくても部屋の中の様子が昼と同様に見て取れる。

これも死神の能力の一つだ。

真由美の部屋には勉強机と可愛らしいベッド、そして大量のぬいぐるみがあった。もっとも、長い間使われていなかったためか多少埃がかぶっているのだが。

「真由美ちゃんのお父さんとお母さんの部屋はどこかしら？」

「気配を感じる。寝ていても人の気配というものは感覚で分かる。精神を研ぎ澄ましてみる」

樹は目を閉じて、思考の糸を四方に張り巡らせる。近くにはルヴアの気配。そして隣の部屋に二人の人間の気配がする。

「わかった。隣の部屋みたい」

「上出来だ」

そういつてルヴアは壁をすり抜け寝室へと入る。樹もそれに続き、

眞由美の両親の寝室に入る。この部屋は八畳ほどの和室でダンスや鏡台などがあり、二組の布団で夫婦が寝ていた。

『夢見石を』

『うん』

樹は懐から夢見石を取り出すと、それを眞由美の両親の枕元に置いた。すると夢見石は光り出して、両親の夢に介入する。眞由美の主観で、楽しかった記憶があふれ出す。幼稚園の遠足、ほとんど登校できなかったとは言え、輝かしい思い出の詰まった小学校と中学校の記憶。それらが両親の夢の中に流れる。そして、二人の枕元に眞由美が立った。

「…………ごめんね、お別れが突然で。苦しいこともたくさんあったけど、楽しかったよ。私、パパとママの子供に生まれて本当に良かった。短い時間だったけど、二人の子供でいられて、本当に幸せでした。ありがとう、パパ、ママ。元気でね。愛しているわ。それから、最後にお願ひ。生きて。生きて。私の分まで生きて。いつか、その時が来るまで。今までありがとう。そして、パパとママより早くいなくなっちゃってごめんなさい。さようなら。パパ、ママ…………」

眞由美の姿が、ゆっくりと消える。両親は揃って、彼女を捕まえようと手を伸ばす。

『眞由美！！』

二人同時に飛び起きた。目元には涙。そして周囲を見渡し、眞由美がいなことを確かめて、思い知らされてしまう。彼女はもう去ったのだと。それから二人は顔を見合わせた。

「いま、夢の中に眞由美が…………」

父親が呆然とした様子で言う。

「私の夢にも眞由美がでてきたわ…………」

「お前もか。夢の中で眞由美は、幸せだったと言っていた」

「二人の子供で良かったって…………愛しているって…………」

母親は堪えきれずに泣き出す。眞由美、眞由美と繰り返しながら。そんな妻をなだめるように、父親は彼女を優しく抱きしめた。

「二人とも、同じ夢を見たんだな……いや、夢じゃない。これはきっと、眞由美からの俺たちに対するメッセージなんだろう……なんで、死んだんだろうな。あんなに良い娘だったのに」

『それが定めだったのだ。仕方があるまい……』
『ルヴァ！』

相変わらずの言動に、この死神には思慮という物が足りていないのではないかと思ってしまう。

「本当に、なんでなのかしら。眞由美、眞由美……」

母親は、またも泣きじゃくりはじめた。その様子は、小さい子供のようにもある。父親は彼女を抱きしめて背中を優しく叩いてやる。「でもな、偶然同じような夢を見たただけだとしても、眞由美が俺たちを愛してくれていたってことだけは確かだ。そして俺たちも眞由美を愛していた。今は、まだ……それだけで良いんじゃないか？」

「私はそう簡単には割り切れないわ。発作を繰り返してばかりで、外でお友達と遊ぶこともできなかったのよ……」

「でも、さっきの夢の学校での眞由美は楽しそうだったじゃないか」

「そうね。あれは本当に、眞由美が枕元に立ったのかしら？」

眞由美の父親は一瞬悩んでから答える。

「……多分な。今まではそんなことは迷信だと思っていたが、二人同時に同じ夢を見るといふのはそういうことなんだろうと思う。今はまだ気持ちの整理もできないだろうが、眞由美は幸せだったと言ってくれた。それだけは事実なんだ。そして最後に、生きるというた。この二つの言葉をかみしめて、前に進もう。眞由美はもういない。でも、思い出は消えやしないんだから……」

「思い出……」

人は、思い出で生きる生き物である。思い出がある限り、死者もまたそこに存在し続ける。それは人間の持つている偉大な能力の一つである。

「そう、俺たちが眞由美のことを忘れない限り、眞由美は消えてなくならない。いつか俺やお前だって死ぬだろう。だけど、それまで

はずつと眞由美と一緒にだ」

「あなた……」

まだ目元に涙は残っているが、母親はようやく泣きやんだ。

「さあ、寝よう。明日からは忙しくなるから、今のうちに休んでおかないと、お前まで倒れてしまうぞ」

眞由美の父親はそういうと布団に潜って三秒後にはいびきをかき始めた。母親もそれを見て布団に潜る。

『思い出か……あいにく我にはそのような物はないが、果してどのような物なのか……』

一部始終を見ていたルヴァが、人間の持つ思い出という機能に興味を持ったようだった。

『何千年も生きてきて思い出がないの？ 嬉しかったこと、楽しかったこと、苦しかったこと。そういうのがみんな集まったのが思い出よ』

『記憶とはちがうのか？』

『記憶は単なる記憶。思い出って言うのはそのときの感情や空気の匂いや水の味、そんなものまで再現できる物なの……わたしも、ほんの少ししか通えなかったけど、学校でできた友達との思い出とか行事の思い出とか、いろいろ持っているわ』

『なるほど……我には難しい命題だが、お前とともに過ごしていくうちに理解しよう』

『それが良いわね……でも、思い出って言うのは感情に結びついてる物だから、死神のルヴァでも大丈夫なのかしら……』

『わからん……だが、お前とならば作れそうな気はする』

『そうね。それじゃあそろそろ、病院に帰りましょう。夜間巡回の時にいないと大変だし』

『そうだな。それでは戻るとしよう。しかし、また空を飛んでいくのも面倒だ。空間転移で帰ることにしよう』

『空間転移？』

初めて聞く言葉に首をかしげる。空間転移、超能力的に言えばテ

レポーターションだが、厳密には異なる物である。

『それ、大丈夫なの？』

樹の質問にルヴァが首　猫の首だが　を縦に振る。ルヴァから空間転移の方法を学んだ樹は、病室を思い浮かべて跳躍するイメージを頭に描いた。そうするとふわっと体が浮いたような感覚になりながら風景が二転三転し、気が付くと自分の病室にいた。

「これが空間転移だ」

「本当に瞬間移動したのね……死神って実は凄いの？」

「あたりまえだ」

樹のどこかずれた質問にもルヴァは真面目に答える。

「死神とはいえ仮にも神だ。これぐらいの芸当など、いくらでもこなせるぞ。まあ、必要になった時点で必要な物を教える。とりあえずは休め。半分人間のお前には、体力の回復が必要だ」

「そうね。少し疲れたし、眠るわね」

ルヴァと分離して人間体に戻ると、飛行や空間転移で力を使った分疲労がどつときた。

「おやすみ、ルヴァ」

ああ、ゆっくりと休むが良い

ルヴァが優しい声で言う。それから十数分後、樹は眠りに入っ
た。

死神と少女の出会いの物語はこれで終わる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3998v/>

魔都物語

2011年9月4日03時48分発行